

陸前高田市文化財調査報告書第27集

陸前高田市内遺跡発掘調査報告書

獺 沢 貝 塚

平成19年3月
岩手県陸前高田市教育委員会

発刊にあたり

陸前高田市教育委員会

教育長 伊藤 勲

陸前高田市は、目前に太平洋、後ろに北上山系の山々を背負い、四季折々にその恩恵を受けて発展して来ました。水と緑に囲まれた豊かな風土の中でも、特に海がもたらす恵みは大きく、リアス式海岸という自然の漁場は古来より今日に至るまで高田に住むものを潤し続けています。古き人々がいかにして高田の自然とつきあい、生活していたのか、その根拠となるべき遺跡が市内各所に存在し、貝塚をはじめ、城館や古街道跡、住居跡等、その数は 250 箇所以上にものぼります。中でも広田半島を中心とする縄文時代の遺跡群には国指定史跡『中沢浜貝塚』や、縄文時代後期の標識土器『門前式土器』で有名な門前貝塚など著名な貝塚が数多く存在しています。

鰐沢貝塚はその中の一つであり、保存状態の良好な人骨や、漁撈具をはじめとする豊富な骨角器が出土したことでも知られています。

これらの遺跡は祖先が我々に残してくれた貴重な遺産であり、大切に保護していくかなければならないものです。

しかし、文化財の保護と市勢発展のための開発行為の両立は難しく、近年になっても携帯電話サービスの普及による電話塔の設置や住宅・道路・漁港整備等のため止むを得ない発掘調査が存在します。一度掘り起された遺跡は二度と元には戻りません。それゆえに、発見された遺構・遺物等ができる限り詳細かつ正確に記録し、情報を未来に伝えて行くことが遺跡の文化的活用の第一歩になると思われます。また、地域への“知”的蓄積と文化の独自性を支えるために、遺跡の周知は不可欠です。当市教育委員会では速報資料展を企画し、資料を市民に公開するなどして遺跡の持つ重要性と魅力を伝えてきました。

その集成として、この度ここに「鰐沢貝塚発掘調査報告書」が刊行されますことは、陸前高田市の先史、とりわけ縄文時代前期から弥生時代までの生活史を知る上で大変意義深いことと言えます。本書を地域の方々をはじめ、研究者の方々にご活用いただき、ひいては文化財保護思想のさらなる啓蒙にお役立てください。

終わりに、この調査に際しましては、常にご指導ご協力をいただきました岩手県教育委員会生涯学習文化課と、作業に従事してくださった多くの方々、並びに関係各位、また学術的見地からご教示を賜りました諸先生方に対し、深く感謝申し上げると共に、今後ともご指導ご協力を賜りますようお願い申し上げ、発刊にあたってのあいさつといたします。

平成 19 年 3 月

例　言

- 1 本書は、岩手県陸前高田市小友町字鶴沢地内に位置する鶴沢貝塚の発掘調査報告書であり、平成16年度に行われた調査を取りまとめたものである。
- 2 本遺跡の発掘調査は、個人の畠地造成に伴う緊急発掘である。調査は陸前高田市小友町字鶴沢16鈴木陽夫より依頼を受け、陸前高田市教育委員会生涯学習課で担当した。
- 3 調査期間、調査体制は以下のとおりである。

調査期間 平成16年5月12日～12月3日

調査体制 団長 陸前高田市教育委員会教育長 伊藤壽

総括 陸前高田市教育委員会生涯学習課長 白井佐一

事務局 陸前高田市教育委員会生涯学習課長補佐 及川賢一

調査員 陸前高田市教育委員会生涯学習課副主幹 佐藤正彦

陸前高田市教育委員会生涯学習課主事 小金山一義

発掘調査員 遠藤勝博

発掘調査員 遠藤優子

- 4 野外調査と室内整理は、小金山一義、遠藤優子が行った。
- 5 本報告書の執筆はV3を遠藤優子が担当し、その他の執筆と編集を小金山が行った。
- 6 調査及び整理に際しては、以下の方々のご指導、ご助言を賜った。記して感謝を申し上げる次第である。(順不同・敬称略)
渡辺誠(名古屋大学名誉教授)、熊谷常正(盛岡大学)、佐藤嘉広(岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課) 水野いずみ・佐々木洋(陸前高田市立博物館)
- 7 石材鑑定は佐藤悦郎(大船渡市役所)に依頼した。(敬称略)
- 8 掲載した土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著「新版標準土色帳」第4版によった。
- 9 野外調査に際しては、以下の方々の協力をいただいた。(順不同・敬称略)
佐藤多恵子、佐藤とも子、鈴木初子、村上典子、村上和子、菅野照子、佐々木のり子、佐々木多美子、佐藤キミ子、新沼浩美、大谷典子、上部ケイ子、岡本典子、岩崎ミヨ子、白井英子、佐々木文江、佐々木成子、桜井一子、佐藤一雄、村上昭彦、藤畠利秋、紺野隆平、吉田民一、佐々木喜美治、前川ヨシ子
- 10 室内整理及び報告書の作成にあたっては、次の方々の協力をいただいた。(順不同・敬称略)
佐藤多恵子、佐藤とも子、鈴木初子、佐々木多美子、佐藤キミ子、新沼浩美、大谷典子、佐々木文江、佐々木成子、菅原とみ子、及川幸美、及川洋子、桜井一子、佐々木奈穂子、戸羽由美、鈴木貞子、菅野トシエ、菊池紀春
- 11 本遺跡で出土した遺物及び調査資料は、陸前高田市埋蔵文化財収納庫に保管している。
- 12 野外調査においては小友町鶴沢地区をはじめとする地元の方々のご協力をいただいた。
- 13 調査対象面積は422m²であるが、遺構確認作業の結果、精査面積を390m²に絞り込んでいる。
- 14 図中で使用したスクリーントーンの表示は以下のとおりである。



:磨面



:敲打面



:黒色物質



:朱

目 次

発刊にあたり

例言

目次

I	調査に至る経過及び調査過程	1
II	遺跡の位置と周辺の環境	2
III	調査と室内整理の方法	
1	調査方法	11
2	室内整理	11
IV	検出された遺構	
1	焼土遺構	13
2	土坑	14
V	遺構外出土遺物	
1	土器	16
2	土製品	64
3	石器	67
VI	考察とまとめ	78
	報告書抄録	

挿図目次

第1図	獺沢貝塚位置図	3
第2図	地形分類概念図	4
第3図	獺沢貝塚地形図	5
第4図	発掘区（グリッド設定図）	6
第5図	周辺の遺跡分布図	7
第6図	層の堆積状況図	9
第7図	遺構配置図	12
第8図	焼土	13
第9図	焼土内出土遺物	13
第10図	土坑	14
第11図	土坑内出土遺物	15
第12～51図	遺構外出土土器	24～63
第52図	土製品	65
第53図	土製円盤	66
第54図～58図	石器	70～74

写真目次

写真図版1	調査区遠景・完堀状況	80
写真図版2	遺構・作業風景	81
写真図版3	セクション	82
写真図版4	遺物出土状況	83
写真図版5～6	土器	84～85
写真図版7	遺構内出土遺物・土器	86
写真図版8～14	土器	87～93
写真図版15	土器・土製品	94
写真図版16～18	石器	95～97

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧表	8
第2表	土層観察表	10
第3表	土製品一覧表	66
第4表	石器一覧表	75～77

I 調査に至る経過及び調査過程

本発掘調査は、獺沢貝塚範囲内に係る個人の畑地造成に伴う調査である。

平成 12 年 10 月 23 日、事業主体者陸前高田市小友町字獺沢 16 鈴木陽夫より畑地造成を獺沢地内に実施したいとの申し出が当教育委員会になされた。これを受け、工事予定地内の試掘調査をおこなった結果、縄文晩期から弥生時代の土器片や石器などが多く出土した。このため、当教育委員会では本調査が必要との見解を事業者に示した。

平成 16 年 3 月 26 日、同工事の実施にあたり事業者から文化財保護法第 57 条の 3 第 1 項（現第 92 条の 3 第 1 項）の規定による埋蔵文化財発掘の通知がなされた。当教育委員会の現地調査書を添え、平成 16 年 4 月 2 日付け陸高教生第 5 号で岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課に進達した。

平成 16 年 4 月 5 日付け教生第 7-435 号において、県教育長より工事着手前の発掘調査をおこなうようにとの通知があり、事業主体者へ伝達した。

本調査の実施に向け、発掘の時期や予算の最終的な調整を進め、平成 16 年 5 月 12 日に発掘調査開始となった。平成 16 年 6 月 25 日付け陸高教生第 76 号において、その旨を県教育長に報告した。

発掘調査はその後平成 16 年 12 月 3 日まで行われ、その成果は今回報告するとおりである。

なお、出土遺物については平成 17 年 2 月 16 日付け陸高教生第 199 号により遺失物（埋蔵文化財）発見届を大船渡警察署に提出し、同月日付け陸高教生第 200 号により保管証を県教育長あて提出している。

これを受け、平成 17 年 2 月 28 日付け教生第 9-79 号において県教育長より文化財の認定通知があり、平成 17 年 11 月 8 日付け陸高教生 173 号でこれに係る文化財の譲与申請書を提出した。

平成 17 年 11 月 15 日付け教生第 1213 号で県教育長より出土文化財の譲与を認める旨、通知があり、現在、陸前高田市埋蔵文化財収蔵庫にて保管中である。

II 遺跡の位置と周辺の環境

獺沢貝塚は、岩手県陸前高田市小友町字獺沢地内に所在する。

市の中心部から南東方向へ直線距離で約 5 km、岩手県交通広田半島矢の浦経由・獺沢バス停留所付近に位置する。主要地方道大船渡・広田・陸前高田線（県道 38 号）沿いに広田半島基部から西岸を南下し、矢の浦公民館から獺沢漁港に至る周辺である。

陸前高田市は岩手県の東南端、太平洋沿岸に位置し、市域北側で宮城県と接している。市の中心部（市庁舎）の所在は北緯 39 度 01 分、東經 141 度 38 分、総面積は 232.29 km² である。

隣接する市町村は現在三市一町あり、東は大船渡市、西は一関市、南は宮城県気仙沼市、北は気仙郡住田町となっている。東南部は太平洋に面しており、半島が突き出している。

本市を俯瞰すると、周囲を囲む山々とその裾を流れる河川、これによって形成された細長い平野部と三角州、市を北西に抉る湾部と東南端の半島によって形成されていることが分かる。具体的には東に箱根山（446.8m）、西に黒森山（602.3m）、南に笠長根山（519.9m）、北に水上山（874.4m）がそびえ、囲まれた平野部が開く先に広田湾が存在する。湾は東西を長軸としたゆるやかな楕円を描き、湾口は南を向いている。湾奥部には河川延長およそ 47 km の気仙川が注ぎ、その付近には白砂青松で名高い国指定名勝「高田松原」の砂浜が 2 km に渡って続いている。本市において松原の砂浜を除く海岸線は岩礁であり、三陸沿岸に特有の典型的なリアス式海岸となっている。小さな湾と岬が交互に連続して鋸のように入り組んだ地形は独特の景観を成し、陸中海岸国立公園にも含まれている。国指定天然記念物の蛇ヶ崎もこの地形によるものである。入り江内部は波穩やかな天然の良港であり、また沖は親潮、黒潮のぶつかる世界的な漁場であることも手伝って、古来より好適な漁撈環境を保っている。

本遺跡が所在する広田半島もこれに相当する。太平洋に向かって東南に伸びる半島は中央が細くくびれた“ひょうたん”型をしており、標高的にも中央部が低地帯となっている。低地の規模は幅 500m、長さ 3m、標高 7m 以下であり現在は主に水田や畑地として利用されている。半島南部と北部にはそれぞれ大森山（147.2m）と仁田山（254.0m）がそびえ、その傾斜の周囲に多くの遺跡が点在する。

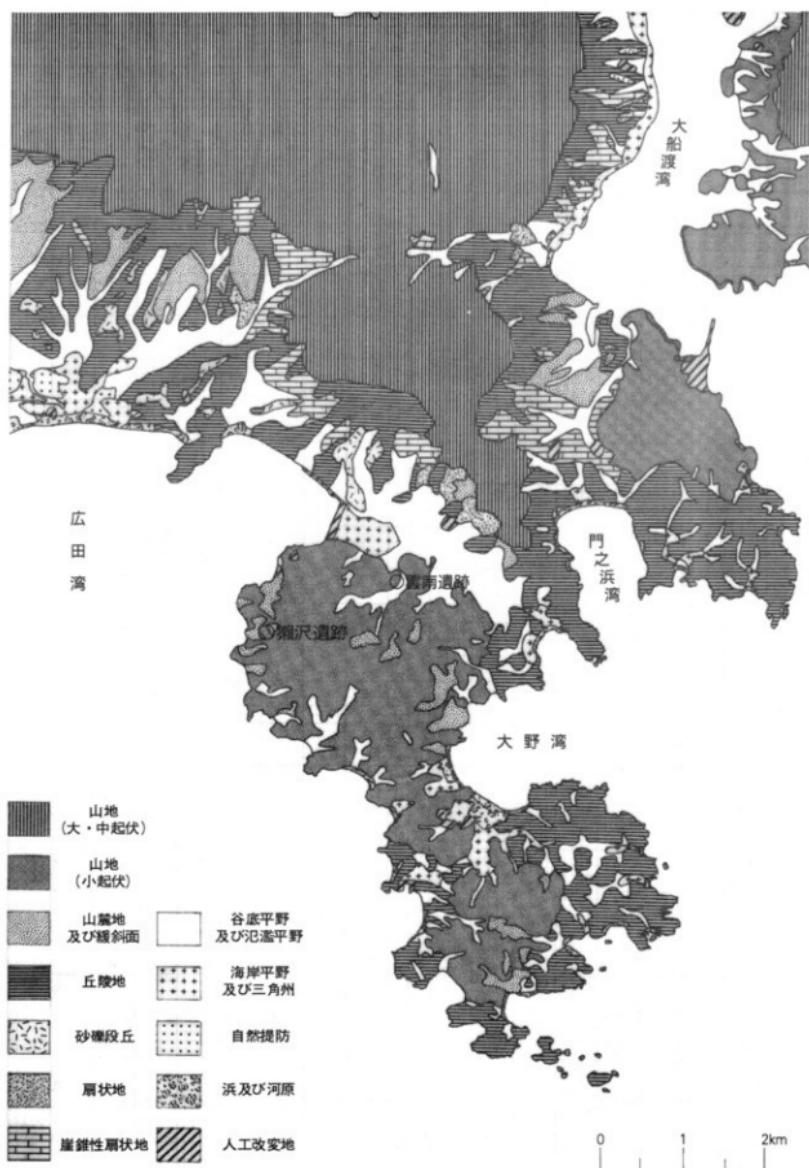
獺沢貝塚はその 1 つであり、仁田山山麓西側の丘陵の先端部に広がっている。西に広田湾を望む傾斜地には西南に流れる沢地形が見られ、そのまま湾内に注いでいたものと思われる。それを裏付けるものとして、今回の調査で旧河道跡を検出した。

旧河道跡は調査区の西端に位置し、西北から緩やかに南東に流れている。カーブ外側の岸の立ち上がりが急なことから、当時の流れの強さが伺える。川道を形成する岩盤のじき上に円礫、角礫がある程度の密度を持って敷石状に並んでいる箇所があり、かつての川原ではないかと思われる。それらは丘陵上部の石質と一致していた。

出土遺物から推定される遺跡の時期は縄文時代前期から弥生時代中期にかけてである。



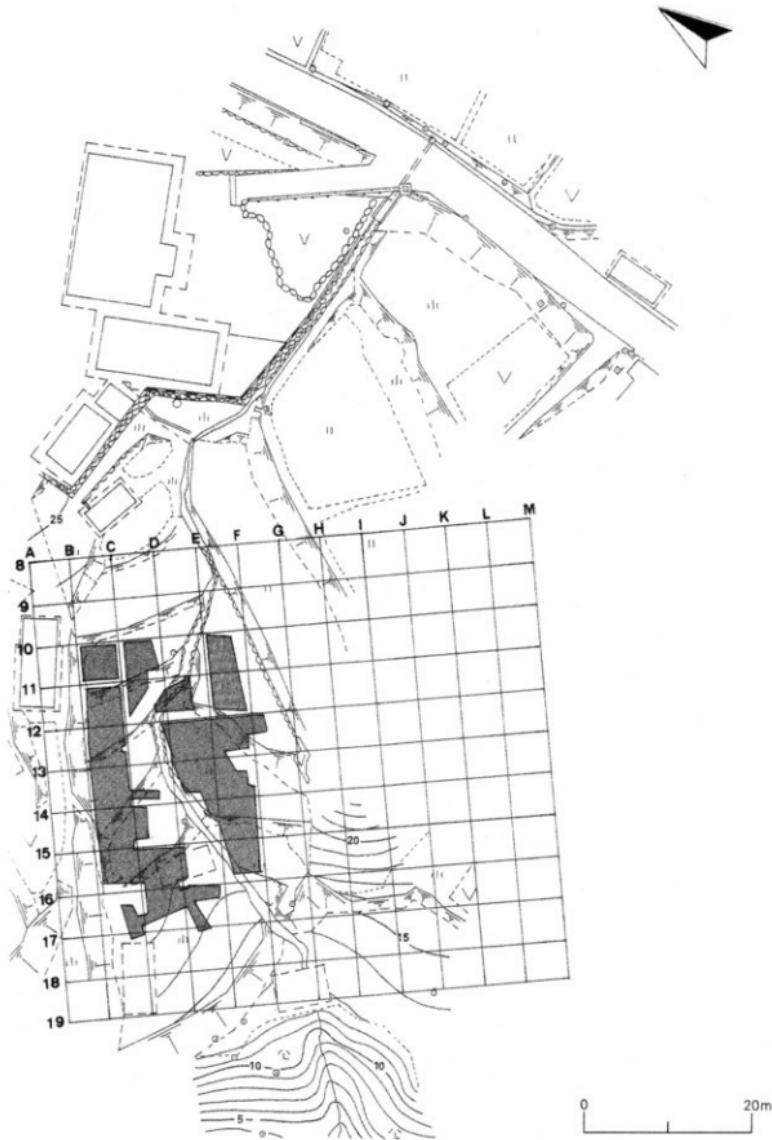
第1図 猿沢貝塚位置図



第2図 地形分類概念図

第3图 猪汎貝塚地形図





第4図 発掘区（グリッド設定図）

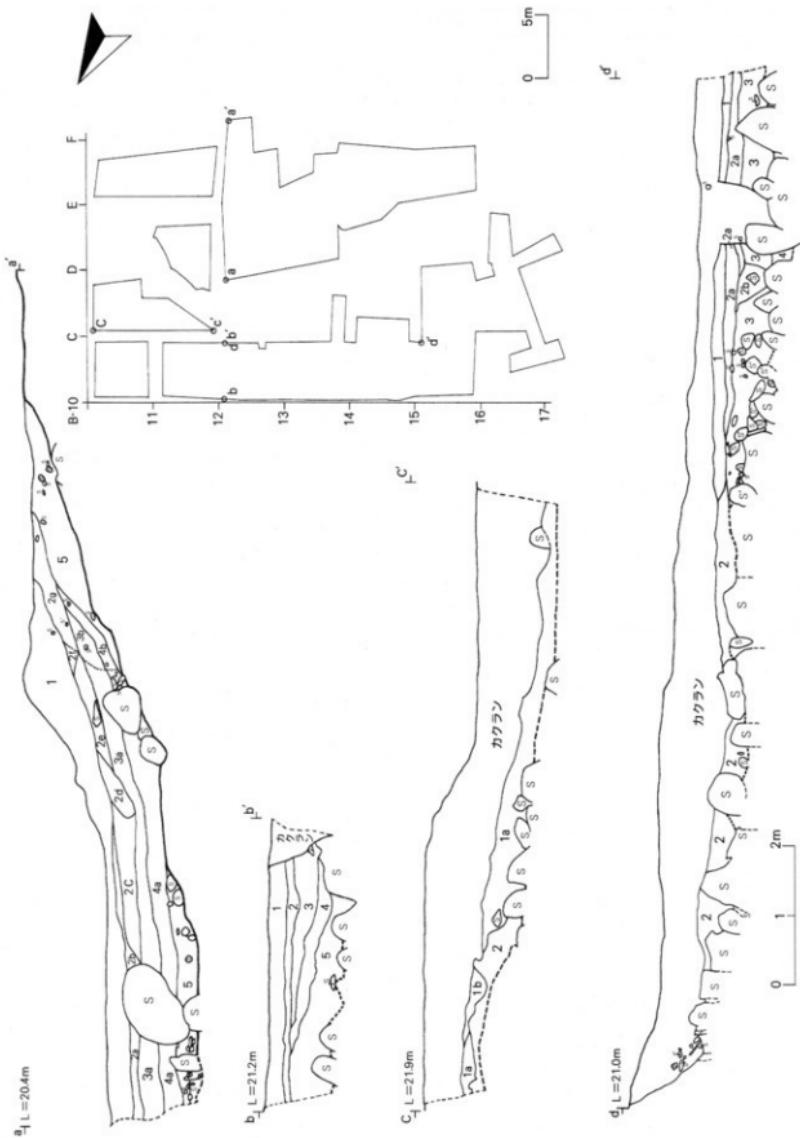


第5図 周辺の遺跡分布図

No	遺跡コード	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地	備考
1	NF88-2130	室の前貝塚	集落跡・貝塚	縄文	住居社、埴土器・土器(中・後期)・土器 石製品・骨角器	米坂町字室の前	平成8・9年調査
2	NF88-2134	金須	散在地		土師器	小友町字金須	
3	NF88-2176	西畠Ⅰ	散在地		土器・土師器・かまご跡	小友町字西畠	
4	NF88-2187	西畠Ⅱ	散在地		土器	小友町字西畠	
5	NF88-2202	西畠Ⅲ	散在地		土器	小友町字西畠	
6	NF88-2352	西畠Ⅳ	散在地		土器・漆器・漆器類・剪刀	小友町字西畠	
7	NF88-2367	中西Ⅰ	散在地		土器・土師器	小友町字中西	
8	NF88-2270	松山前	集落跡	縄文	土器・土師器	小友町字松山前	平成16年理文センターによる調査
9	NF88-2380	中西Ⅱ	散在地	縄文(後期)	土器	小友町字中西	
10	NF88-0108	三日市	集落跡	縄文	土器・土師器	小友町字三日市	
11	NF88-0166	鳥嶋Ⅰ	散在地		土師器	小友町字鳥嶋	
12	NF88-0173	鳥嶋Ⅱ	散在地		土師器	小友町字鳥嶋	
13	NF88-0178	猿谷Ⅰ	散在地		土器	小友町字猿谷	
14	NF88-0182	猿谷Ⅱ	散在地		土器	小友町字猿谷	
15	NF88-0183	猿谷Ⅲ	散在地		土師器	小友町字猿谷	
16	NF88-0189	猿谷Ⅳ	散在地	縄文	土師器	小友町字猿谷	
17	NF88-0229	猿谷Ⅴ	散在地	縄文	土器	小友町字猿谷	
18	NF88-0281	小屋敷	散在地	縄文	土器	小友町字小屋敷	
19	NF88-0292	浦の前	散在地	縄文	土器・石核・刷片	小友町字浦の前	
20	NF88-0321	南越前	城郭跡	中世	主郭・空堀	小友町字南越前	
21	NF88-0358	内郭	城郭跡	中世	主郭	小友町字田代沢	
22	NF88-0362	財当	散在地	縄文	土器・刷片	小友町字財当	
23	NF88-0293	失の浦	散在地	縄文		小友町字失の浦	
24	NF88-0294	失の浦Ⅱ	散在地	縄文	土器・石器	小友町字失の浦	
25	NF88-1543	失の浦Ⅲ	散在地	縄文	土器・石器	小友町字失の浦	
26	NF88-1067	門前貝塚	貝塚	縄文	土器・石器(吸流)・骨頭・土偶・石製品	小友町字門前	平成10年調査
27	NF88-1070	門前Ⅰ	散在地	縄文	土器	小友町字門前	
28	NF88-1086	黒川Ⅲ	散在地	縄文	土師器	小友町字黒川	
29	NF88-1149	天辺Ⅰ	散在地	縄文	土器	小友町字天辺	
30	NF88-1159	中里Ⅰ	散在地	縄文	土器・土師器	小友町字中里	
31	NF88-1202	浜辺Ⅱ	散在地	縄文	土器・石器	小友町字浜辺	
32	NF88-1206	森辺	散在地	縄文	土師器	小友町字茂葉花	
33	NF88-1214	雲南	集落跡	縄文	住居社・埴土器・プラスコピット・土器 (前・中期)・魚骨・装飾品	小友町字雲南	平成13年～16年調査
34	NF88-1217	森崎Ⅱ	散在地		土師器	小友町字茂葉花	
35	NF88-1226	森崎Ⅲ	散在地		土器・漆器	小友町字茂葉花	
36	NF88-1230	森崎Ⅳ	散在地		土師器	小友町字茂葉花	
37	NF88-1246	森崎Ⅴ	散在地	縄文	土器・土師器	小友町字茂葉花	
38	NF88-1267	森崎Ⅵ	散在地	縄文	土師器	小友町字茂葉花	
39	NF88-1270	中里Ⅱ	散在地	縄文	土師器	小友町字中里	
40	NF88-1273	中里Ⅲ	散在地	縄文	土師器	小友町字茂葉花	
41	NF88-1293	東原Ⅳ	散在地	縄文	土器	小友町字東原	
42	NF88-1307	門前貝塚	貝塚	縄文	記石遺構・プラスコピット・人骨・骨角器	小友町字門前	平成元年～3年調査
43	NF88-1323	新田	散在地	縄文	土師器・漆器	小友町字新田	
44	NF88-1376	小ヶ口	散在地	縄文	土師器	小友町字小ヶ口	
45	NF88-1391	高根原Ⅰ	散在地	縄文	土器	広田町字高根原	
46	NF88-1401	高根原Ⅱ	散在地	縄文	土器	広田町字高根原	
47	NF88-2005	高根原Ⅲ	散在地	縄文	土器	広田町字高根原	
48	NF88-2009	高根原・城跡	散在地・城跡	縄文・中世	土器	広田町字高根原	
49	NF88-2130	船形	散在地	縄文	土器	広田町字船形	
50	NF88-2149	大屋裏Ⅰ	城郭跡	縄文	のろ	広田町字大屋裏	
51	NF88-2162	船崎	散在地	縄文		広田町字大屋裏	
52	NF88-2175	大隅台貝塚	貝塚	縄文		広田町字大屋裏	
53	NF88-2194	大隅貝塚	集落跡	縄文		広田町字大屋裏	
54	NF88-2197	大隅第三	散在地	縄文		広田町字大屋裏	
55	NF88-2200	中里Ⅲ	散在地			小友町字中里	
56	NF88-2204	中里Ⅳ	散在地			小友町字中里	
57	NF88-2254	鬼ヶ城跡	城郭跡	縄文	土器(前・中期)・装飾品・石製品	小友町字中里	平成15年調査
58	NF88-2304	鬼見同Ⅲ	散在地	縄文	石器	小友町字鬼見同	
59	NF88-2315	鬼見同Ⅳ	散在地	縄文		小友町字鬼見同	
60	NF88-2321	森野Ⅱ	散在地		石器	小友町字小屋敷	
61	NF88-2361	小屋敷	散在地		土器・陶器	小友町字小屋敷	
62	NF88-1020	森田城	城郭跡			小友町字森田城	
63	NF88-1076	蛇ヶ城城跡	城郭跡	中世	安宅・隈利・平塙・主郭・二の郭	小友町字森田城	
64	NF88-2021	矢前	城郭跡	中世	安宅	小友町字矢前	遺滅
65	NF88-0118	綾田	散在地	縄文	土器・石核・刷片・貝殻	広田町字綾田	
66	NF88-0125	大通場	散在地	縄文	埴土器	広田町字大通場	
67	NF88-0242	湯治	散在地	縄文	土器(吸流)	広田町字湯治	
68	NF88-0250	美加	城郭跡	中世	安宅・隈利・隈知	広田町字美加	
69	NF88-1743	美加	散在地	縄文	土器(吸流)	広田町字美加	半壊
70	NF88-1758	中尻	散在地	縄文		広田町字中尻	
71	NF88-1295	小笠	城郭跡	中世	野	広田町字小笠	
72	NF88-1311	中沢貝塚	貝塚	縄文	土器(早期～弥生)・人骨・骨角器・骨貝	広田町字中沢	平成9年調査
73	NF88-1315	平根	散在地	縄文	土器	広田町字平根	
74	NF88-2239	内田	散在地	縄文	土器	広田町字内田	
75	NF88-2256	久保貝塚	貝塚	縄文	土器	広田町字久保	
76	NF88-2269	久保遺跡	散在地	縄文	土器	広田町字久保	
77	NF88-2274	久保遺跡	散在地	縄文	土器・平塙	広田町字久保	
78	NF88-2302	山根	散在地	縄文	土器	広田町字山根	
79	NF88-1022	瀧田	散在地	縄文	土器	広田町字瀧田	
80	NF88-1031	平根	城郭跡	中世	主郭	広田町字平根	
81	NF88-1052	蛭塚	散在地	縄文		広田町字蛭塚	
82	NF88-1140	大沢	散在地		安宅・隈利・主郭	広田町字大沢	
83	NF88-2030	道會	散在地			広田町字道會	
84	NF88-2104	黒崎	散在地			広田町字黒崎	
85	NF88-0303	金須	散在地	縄文	土器	広田町字金須	
86	NF88-0326	集	散在地	縄文	土器	広田町字集	
87	NF88-0378	東根	城郭跡	中世	安宅	広田町字東根	

第1表 周辺の遺跡一覧表

第6図 層の堆積状況図



(D-12・E-12グリット北壁)

層	層名	セクション	土色	粘性	炭化物	備考
1	にぶい黄褐色砂質シルト	a-a'	10YR4/3	無	なし	
2a	灰褐色シルト	a-a'	10YR4/2	弱	なし	
2b	灰黄褐色シルト	a-a'	10Y4/2	弱	なし	
2c	褐色粗砂	a-a'	7.5YR4/6	弱	なし	水が浸透。表面が赤褐色に変色。鉄分と思われる。
2d	暗褐色粗砂	a-a'	7.5YR3/3	弱	なし	水が浸透。表面が赤褐色に変色。鉄分と思われる。
2e	黒褐色シルト	a-a'	7.5YR3/1	強	なし	水が浸透。表面が赤褐色に変色。鉄分と思われる。
2f	黒色シルト	a-a'	7.5YR2/1	弱	なし	
2g	黒色シルト	a-a'	10Y2/1	弱	なし	
3a	オリーブ黒色シルト	a-a'	10Y3/1	強	なし	水が浸透。表面が赤褐色に変色。鉄分と思われる。
3b	褐色シルト	a-a'	10YR4/1	強	なし	水が浸透。表面が赤褐色に変色。鉄分と思われる。
4a	オリーブ黒色シルト	a-a'	7.5YR3/1	強	なし	水が浸透。表面が赤褐色に変色。鉄分と思われる。
4b	褐色シルト	a-a'	7.5YR4/1	強	なし	水が浸透。表面が赤褐色に変色。鉄分と思われる。
5	黒褐色粘土質シルト	a-a'	10YR2/2	強	少量	水が浸透。

(B-12・D-12グリット北壁)

層	層名	セクション	土色	粘性	炭化物	備考
1	黒褐色シルト質砂	b-b'	10YR3/2	無	なし	
2	暗褐色砂質シルト	b-b'	10YR3/3	無	なし	表面が赤褐色に変色。鉄分と思われる。
3	黒色シルト	b-b'	7.5YR2/1	弱	なし	
4	黒褐色シルト	b-b'	10YR3/1	無	なし	
5	黒色シルト	b-b'	7.5YR2/1	弱	なし	

(C-10・C-11グリット西壁)

層	層名	セクション	土色	粘性	炭化物	備考
1a	暗オリーブ灰色粘土質シルト	c-c'	5GY3/1	強	なし	水が浸透。表面が赤褐色に変色。鉄分と思われる。
1b	暗オリーブ灰色粘土質シルト	c-c'	2.5GY3/1	強	なし	水が浸透。表面が赤褐色に変色。鉄分と思われる。
2	褐色粘土質シルト	c-c'	10YR4/4	強	なし	

(B-12・B-15グリット東壁)

層	層名	セクション	土色	粘性	炭化物	備考
1	黒褐色シルト	d-d'	7.5YR2/2	弱	なし	
2	黒色シルト	d-d'	7.5YR2/1	弱	なし	
2a	黒色シルト	d-d'	7.5YR2/1	弱	微量	焼土微量。
2a'	褐色シルト	d-d'	7.5YR4/6	強	微量	焼土。
2b	黒色シルト	d-d'	7.5YR2/1	弱	微量	焼土微量。
3	黒褐色シルト	d-d'	10YR3/2	弱	なし	
4	黒褐色シルト	d-d'	7.5YR2/2	弱	なし	真砂少量。

第2表 土層観察表

III 調査と室内整理の方法

1 調査方法

- (1) 重機により表土を取り除く粗掘りを行い、その他はすべて手掘りによって掘り下げた。
- (2) 基軸線の設定は、任意の基準杭を原点として、それと他の基準杭の 2 点を結んだ直線と原点に直行する直線を基軸線とした。基軸杭を結んだ基軸線は磁北より約 50 度偏している。グリッドの設定は 5 m × 5 m のメッシュで区画した。グリットの名称は、東西方向に西から A～M のアルファベットをあたえ、南北方向に北から 8～19 の番号をつけた。
- (3) 平面図、断面図の実測は、グリット軸に合わせた 1 m メッシュを基本とし、10 分の 1、20 分の 1 の縮尺を用いた。
- (4) 遺物の取り上げは原則として、遺跡名（UZ）、出土年月日、グリット名、出土層名を記録し取り上げた。また、焼土は分析のためビニール袋に入れ、持ち帰った。
- (5) 写真記録は 35mm モノクロ、カラー、カラースライド各 1 台を用い、各種埋土堆積状況や断面、遺物の出土状況について撮影をおこなった。また、必要に応じてデジタルカメラを用いたところもある。撮影に当たっては、整理時の混乱を避けるため撮影カードを利用した。

2 室内整理

野外調査で得られた実測図、写真、遺物の各種資料は、室内整理の段階で以下のとおり処理、整理し資料化をおこなった。

(1) 土器・土製品

発掘調査後、室内に持ち帰り整理をおこなった。今回の調査では、57×42×26cm のコンテナで約 28 箱程度の出土量があった。水洗後、各遺物に注記をおこない、各出土地点、層位毎に仕分けをし、復元した。

(2) 石器

石器は水洗後、フレーク類から石器を抜き取り、大まかな器種毎に仕分けし、台帳登録をおこなった。データはコンピューターに入力し管理した。石材の分析は佐藤悦郎氏（大船渡市役所）に鑑定を依頼した。

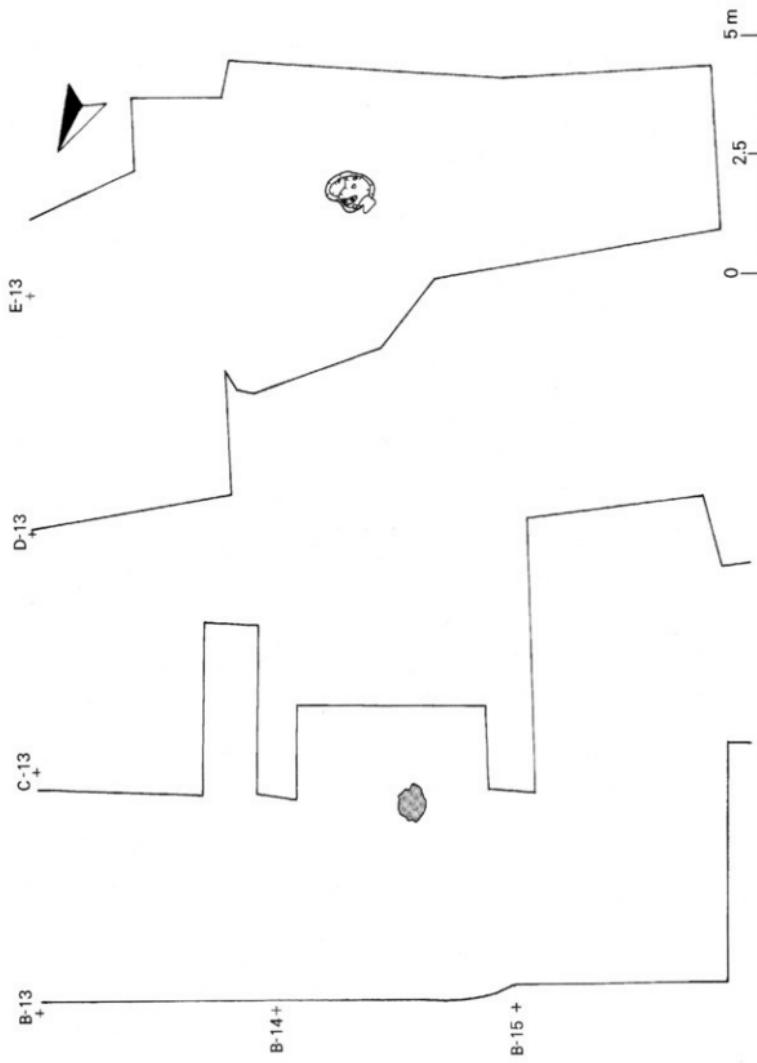
(3) 図面

遺構実測図は、遺構名、グリット、レベルなどに記載の誤りや漏れがないか調査中に点検を行なったが徹底することができなかつた。室内整理の段階で、平面図と断面図の照合・修正が可能なものについては第 2 原図を作成し用いた。

(4) 写真

写真是、ネガと密着焼き付けのものをアルバムに貼付し整理し、カラースライドはスライドファイルに撮影順に収納した。

第7図 連構配図



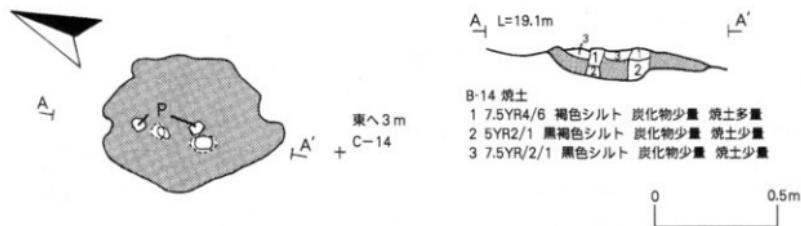
IV 検出された遺構

平成 16 年度の調査において検出された遺構は、土杭 1 基、焼土遺構 1 基である。出土遺物から遺構の時期は縄文時代晩期から弥生時代にかけてと推定される。遺構の位置は、焼土遺構が B-14 グリッド、土杭が E-14 グリッドから検出されている。どちらも標高 20m 付近であり、それぞれ発掘調査区の西端と東端にあたる。

B-14 は丘陵の鞍部を利用した休耕田の半ばにあり、沢地形を伴った傾斜で海に向かって南西方向に傾いている。E-14 も同様の地形であり、B-14 から沢を挟んで東側の傾斜内にある。

1 焼土遺構（第 8 図 写真図版 2-1～2）

B-14 グリッドにおいて検出した。東端の中央部に位置する。平面形は橢円形。長軸 75 cm、短軸 56 cm、焼土の厚さは約 7 cm である。焼土中央部に直径 5 cm の円筒形の掘り込みが 2 基あり、南北軸に 10 cm の間隔を開けて並んでいる。付近に堅穴住居等の遺構は見られなかつた。



第 8 図 焼土

【出土遺物】（第 9 図 1～2 写真図版 7-1～2）

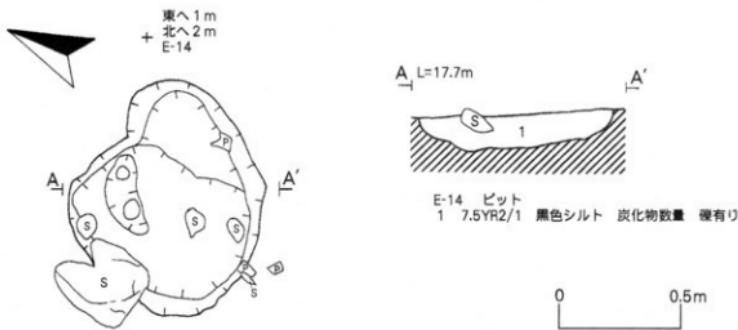
土器片が 2 点出土している。2 点を図示した。いずれも薄手であり、1 は深鉢片と思われる。無文であり表面に微量の炭化物が見られた。2 は深鉢片である。平行する横位の綾線文が 2 条走り、繊維の跡がはっきりと確認できる。地文の縄文が縦走し、文様の一部が磨り消されている。時期は弥生時代中期後葉～後期前葉と思われる。



第 9 図 焼土内出土遺物

2 土坑（第10図 写真図版1-3~4）

E-14グリッドにおいて検出した。グリッド中央部に位置する。平面形はほぼ橢円形。規模は開口部が $100\times 82\text{cm}$ 、底部が $86\times 72\text{cm}$ 、深さが 12cm 。壁は緩やかに外傾している。埋土は1層からなり、自然堆積である。発掘時、休耕田を形成する石垣の下から発見され、すでに破壊が進んでいた。出土遺物から遺構の時期は縄文時代後～晩期と推定される。

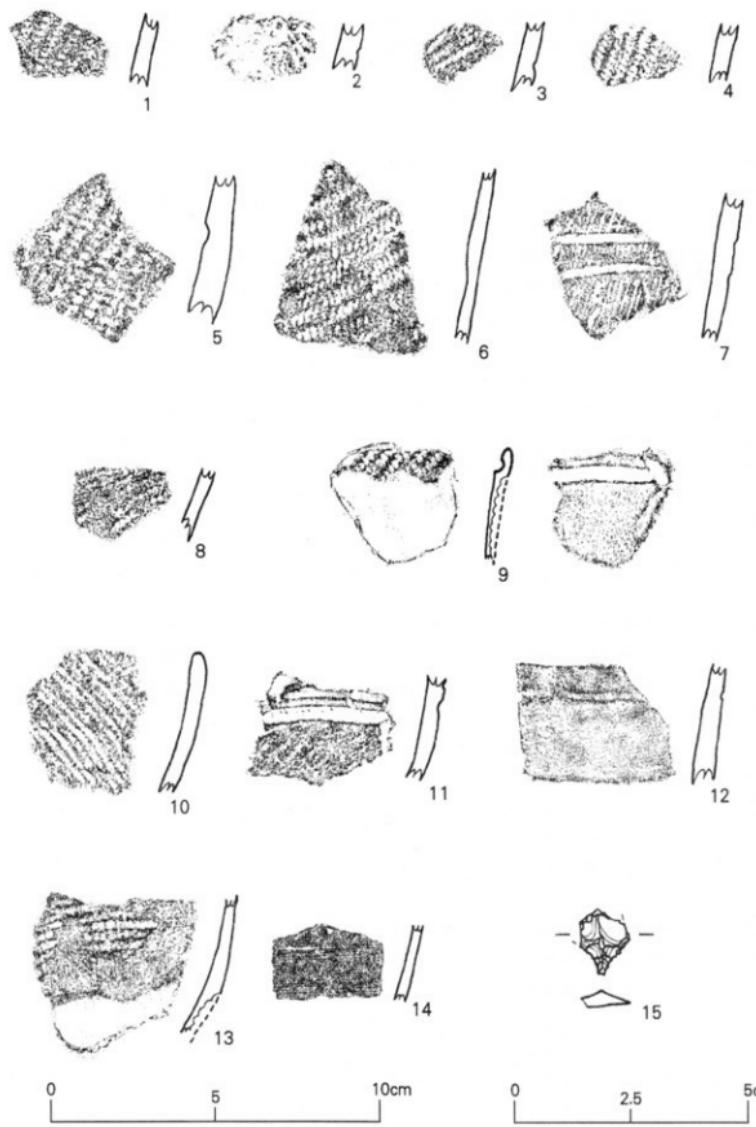


第10図 土坑

〔出土遺物〕（第11図1~15 写真図版7-3~17）

土器片が14点、石鏃が1点出土している。全て図示した。1~4は小片であり器種の特定ができなかった。1は単節斜縄文（RL）を有している。2は表面が劣化してほとんど文様が残っていない。一部に単節斜縄文（LR）が見られる。胎土に粗砂を含んでいる。3も表面の磨耗により体部の地文が薄く残るのみである。単節斜縄文（LR）が見られる。4も単節斜縄文（LR）を有している。5~7は深鉢片である。5は単節斜縄文（RL）を有している。6は単節斜縄文（LR）を有している。胎土に雲母、ガラス質の細砂を含む。7は地文に細かな条痕文が施され、その上を横位の沈線が2条平行に走っている。8は表面が劣化し、文様が消失している。一部に単節斜縄文（LR）が見られる。9、10は口縁部である。9の表面は口縁部を除いてはがれ落ちている。口縁部の線に単節斜縄文（LR）が見られる。裏面口縁部付近には横位の沈線が1条走っている。10は深鉢片と思われる。表面に単節斜縄文（RL）が見られ、胎土には細砂を多く含んでいる。11は表面に横位の沈線が2条平行に走っている。工字文の一部と思われる。時期は大洞A式と思われる。裏面は滑らかに磨かれている。12は表面が滑らかに磨かれており、浅い沈線が一条横走している。13は浅鉢片である。表面は劣化し、下部が剥がれ落ちている。一部、縄文を施している。文様はRLである。14は無文である。

15は有茎の石鏃である。欠損しており、身部の全体形および側縁の形状は不明である。基部は尖基をなし、身部の長さより短い。石材はチャートである。



第11図 土坑内出土遺物

V 遺構外出土遺物

平成 16 年の額沢貝塚発掘調査で出土した遺物は、土器・土製品・石器である。

土器は $56 \times 42 \times 26$ cm のコンテナで 28 箱出土した。(石器は $56 \times 42 \times 26$ cm のコンテナで 5 箱) 時期的には縄文時代前～晚期、弥生時代のものがあり、土師器も一点出土している。

1 土器

第 I 群土器 (第 17 図～第 19 図 21 写真図版 7-18～85)

縄文時代前期初頭に相当すると思われるものである。いずれも、胎土に纖維が含まれている。

1 類 (第 17 図 1～4 写真図版 7-18～21)

体部に結束のない羽状縄文を施すものである。地文は単節斜縄文で焼成が甘く、表面が脆い。第 17 図 2～4 は裏面を横方向に撫でて調整している。

2 類 (第 17 図 5～11 写真図版 7-22～26)

地文の上に縄文原体の側面圧痕文が施されるものである。第 17 図 5 は底部側面である。

3 類 (第 17 図 12～17 写真図版 7-27～34)

ループ文を有するものである。大木 1 式に相当すると思われる。いずれも数条のループ文が平行に横走している。第 17 図 14、15 は口縁部片であり、口唇部の形状は丸みを帯びている。

4 類 (第 17 図 18～第 19 図 21 写真図版 7-35～85)

縄文のみが施されているものである。第 18 図 22 は地文の一部を磨り消している。第 19 図 18～19 は 0 段多条である。第 19 図 20 には穿孔があり、修復の痕跡と思われる。第 19 図 21 は土器の底部である。表面の劣化により地文が判別不能のものもあるが、掲載した。

第 II 群土器 (第 19 図 22 写真図版 7-86)

縄文時代前期末葉 (大木 6 式) に相当すると思われるものである。出土数はわずかであり、ここに掲載する 1 点のみである。深鉢の口縁部片であり、地文 (単節斜縄文・R L) の上に半截竹管による山形文が数条横走している。細片のため、全体のモチーフは不明である。

第 III 群土器 (第 19 図 23～25 写真図版 7-87～89)

縄文時代中期後葉に相当すると思われるものである。うち、第 19 図 23 は大木 9 式に相当すると思われる。深鉢の口縁部片であり、口縁はやや内傾する。口縁部上方～口唇部に縄文が施され、口縁に沿って二条の沈線が平行に横走している。体部には逆 U 字 (U) の沈線で区画文が描かれ、区画の内側には縄文が充填されている。文様は途中で破損しているが、長楕円の区画文が縦位に並列する文様単位の一部と思われる。口縁部と沈線の区画内のほかに縄文は施されていない。

第IV群土器（第20図1～第23図3 写真図版8-90～151）

縄文時代後期に相当すると思われるものである。

1類（第20図1～6 写真図版8-90～95）

網目状撚糸文が施されるものである。出土数は少数で、いずれも細片である。

2類（第20図7～第21図16、第22図14～18 写真図版8-96～125、144～148）

縄文時代後期初頭～前葉に相当すると思われるものである。第20図9、10は深鉢の口縁部片であり、隆帶とその上に施される刺突で文様が形成されている。うち9は断面形がやや外反し、口唇部が丸みを帯びている。10の口縁部はやや内反し口唇部上方が平らに撫でられている。第20図11～14も口縁部片であり、沈線及び刺突で文様が形成される。うち、14には穿孔がある。第20図17～第21図16は胴部上半で平行する縄文帯を横方向に展開し、この間を渦巻き文、あるいは斜行帯縄文等でつなぎ、区画外を磨り消している。全て深鉢片であり、口縁部はゆるやかに外反する。第22図14は1～3条の縄文帯が口縁部周辺を横走し、斜行、屈折して文様を形成している。縄文の回転方向を区画によって変化させており、横走する沈線内は横回転、斜行する沈線内は縦回転の縄文を施している。体部には地文のみが施され、口縁部との境界が3条の平行沈線で区画されている。

3類（第21図17～第22図6 写真図版8-127～136）

縄文時代後期中葉に相当すると思われるものである。いずれも深鉢片と思われる。第21図20は胴部上半に縄文を束にしてめぐらし、それを縦位のS字状沈線で区切っている。また第22図4には口縁部から発達した耳状の突起がつく。

4類（第22図7～11 写真図版8-137～141）

曲線的な区画文の内側に沿って、連続刺突文を施すものである。沈線で区画された文様の内側に縄文を充填し、竹管または棒状の工具により狭い間隔で連続した刺突文を施している。第22図10、11は口縁部片であり、口唇部が丸みを帯びている。出土は少数であり、細片のため全体のモチーフは不明である。

5類（第22図12、13 写真図版8-142、143）

口縁に刻み目が施されるものである。いずれも鉢の口縁部片と思われる。このうち第22図12はゆるやかな波状口縁である。口唇部に押圧による縦長の刻み目が連続で施されており、その下には横位の平行沈線が3条めぐっている。焼成がよく、黒光りする。

6類（第23図1～3 写真図版8-149～151）

縄文時代後期後葉～末葉に相当すると思われるものである。弧線で区画された縄文帯によって文様を形成している。細片のため、全体のモチーフは不明である。

第V群土器（第23図4～第41図6 写真図版8-152～13-359）

縄文時代晩期に相当すると思われるものである。

1類（第23図4 土器写真図版152）

晩期初頭（大洞B式）に相当すると思われるもので、三叉文の一部と思われる沈線で描かれた文様があり、縄文は見られない。出土はこの破片のみで、細片のため全体のモチーフは不明である。

2類（第23図5～15 写真図版8-153～163）

晩期前葉（大洞BC式）に相当すると思われるものである。出土量は少ない。第23図5、6は壺の頸部である。第23図7、8は注口土器の肩部張り出しの屈曲部と思われ、断面は「く」の字に内反する。沈線で区画された無文帯で渦文（C字文）が絡みあつた唐草風の入り組み文が施されており、表面が磨かれている。第23図9～15は細片のため器種の特定ができなかつたが、幅の狭い浮彫的な隆線に沿うように突起帶（珠文）が走っている。羊齒状文と思われる。

3類（第23図16～第24図5 写真図版8-164～9-174）

晩期前葉から中葉（大洞BC～C1式）に相当すると思われるものである。

第23図16は壺の頸部であり、曲線的な沈線によって区画された磨消縄文が施されている。区画の外側に沿うように四角形の突起帶が走っている。第24図5は鉢の口縁部と思われる。口唇部及び縄文に朱と思われる赤色塗料が付着しているが成分は特定できなかつた。

4類（第24図6、7 写真図版9-175、176）

晩期中葉（大洞C1式）に相当すると思われるものである。第24図6は注口土器の下半部と思われる。沈線による渦文が描かれている。第24図7は弧線で描かれた区画の内側に磨消縄文が施され、x字文が展開している。出土量は少なく、全て細片である。

5類（第13図1、第24図8、9 写真図版5-8、9-177、178）

晩期中葉（大洞C1～C2式）に相当すると思われるものである。第24図8、9は注口土器の肩部張り出しの屈曲部であり、第13図1は皿である。弧線の区画による磨消縄文が文様の主体だが、C1、C2双方の特徴を持ち、また細片のため区分が難しく、中間に位置づけた。

6類（第12図1、5、7、第13図2、3、第24図10～第35図4 写真図版5-1、5、7、9、10、9-179～11-292）

晩期中葉（大洞C2式）に相当すると思われるものである。出土土器の中で最も多く、主体をなすものである。

第24図10～第29図2（第25図6を除く）は地文の上を二～三条の平行する沈線で区切り、区画の外を磨消して文様帶としている。この文様帶が交互にS字とZ字を描くよう

に横走し、頸部～口縁部付近に施されている。雲形文と思われる。うち第 24 図 10～第 25 図 7 は壺の頸部及び体部片、第 25 図 8～10 は注口土器の口縁部及び肩部張り出しの屈曲部、第 25 図 11～第 21 図 7 は浅鉢、他は深鉢片と思われる。

第 25 図 6 は壺の体部片と思われる。連続する雲形文が極端に平行化し、ほぼ工字を描く文様である。文様は浮き彫り的な隆帯で表現され、大洞 A 式の工字文に比べ、幅が広い。磨消繩文は使われず、表面が磨かれている。

第 29 図 3～9、第 13 図 2 は壺、第 29 図 10、11 は浅鉢である。縦・横を直線的な平行沈線で区切り、さらにその内側を弧線、斜行する沈線、または横位の橈円で区画している。区画の内側には磨消繩文が施され、それらの文様は主に口縁部から頸部に集中している。

第 29 図 2～第 34 図 2、第 12 図 8 は深鉢片と思われる。口縁部周辺を横走する平行沈線で区切り、さらにその沈線内を縦走する線で工字・匹字に区切る。区切られた区画はやや浮き彫り的な隆帯として整えられ、その中央に連続した刺突列が一条（ないし二条）横走している。これらの文様は口縁部にのみ集中し、体部には繩文（主に単節斜繩文 L R・R L）が施されている。全体的に薄手で、焼成がよく、固い。横走する刺突列は、隆帯の上に直接施される場合と、隆帯中央に沈線を引き、その底に沿って充填されるパターンがある。また、この文様単位は概ね一列のものが多く見られるが、二列以上の器種（第 31 図 3、第 32 図 4）もある。口唇部は平縁、ゆるやかな波状口縁、波状口縁の頂点が二股に分かれるもの、などがあり、口唇部上方に沿って刻み目が施されるものもある。波状口縁のものは、それぞれの頂点が口縁部文様帶の中心（縦走する沈線）に対応している。

第 12 図 5 は台付鉢と思われる。頸部から口縁部にかけて、横走・斜行する沈線を巡らし、文様を施している。口縁部には二個一対の小突起と、発達した大突起とがあり、大突起の先端に短沈線が巡っている。口唇部には押圧による縦の刻み目が連続で施されている。断面形は口縁部直下で最大径となり、ゆるやかに内傾する。

第 13 図 3 は注口土器である。磨消繩文の区画内に隆帯で左右対称の渦巻き文が描かれている。肩部の張り出しに三叉状の沈文を施し、その外側に縦の刻み目を施している。底部付近は無文である。

7 類（第 12 図 6、第 14 図 1、2、第 15 図 4～10、第 35 図 5～10 写真図版 5-6、11、12、6-21～27、11-293～298）

晚期中葉～後葉（大洞 C2～A 式）に相当すると思われるものである。

第 35 図 5 は壺、第 35 図 6 は浅鉢片と思われる。大洞 A 式に見られる連続した流水工字文であるが、より曲線的で幅が広く、C2 式との中间として分類した。隆帯内に磨消繩文は見られない。第 35 図 7 は鉢の頸部～口縁部片である。文様は第 35 図 6 と類似しており、磨消繩文のない太目の流水工字文である。断面形は頸部がやや直線的に張り出し、口縁部がゆるやかに内傾する。口唇部は丸みを帯びており、裏面に沈線が一条横走している。波状口縁である。第 12 図 6 は台付鉢である。体部に繩文（R L）を施し、口縁部を横撫でして無文帯形成している。台部は表面が磨り消され、無文である。口縁部に粘土瘤の貼り付けがあるが一部が欠損している。また台の下部縁にも二個一対の粘土瘤が三組貼り付けられている。第 15 図 4、5 は台付鉢の底部台、6～10 は高台付鉢の底部台と思われる。横走

する平行沈線で文様が描かれている。

8類（第14図3～7、第15図2、第35図11～第40図8 写真図版5-13～15、6-19、
11-299～12-349）

晩期後葉（大洞A式）に相当すると思われるものである。平行沈線を縦方向の沈線で工字状に連結し、沈線で区画された内側を浮き彫り的な隆帶として文様を施している。工字文と思われる。前段階のC2式に比べ、隆帶は細線化し、隆帶内の磨消繩文も消滅している。

第35図11～第36図9、及び第14図3～7、第15図2は壺である。第14図3～4は口縁部片である。4には工字文が描かれている。第15図5は頸部に直線的な浮線文によって文様が描かれるものである。四角形の区画を対角線状に区切る二条の浮線文が走っている。頸部から口縁部への立ち上がりは内傾する。第14図6は頸部周辺に直線的な工字文が施され、横走する沈線が縱走する二条の短沈線で区切られている。焼成よく、表面は研磨されており、黒光りして固い。底部には粘土の貼り付けによる小型の脚部が4脚ついている。第14図7はやや幅広の流水工字文が描かれている。

第36図10～第37図3は浅鉢（うち第37図2、3は破損しているが脚付）である。直線的な工字文が口縁部に一条から数条、狭い範囲で施される。第37図3は口縁部片であり、細い隆帶によって口縁部に連続した山形文が描かれ、その下部には隆帶が直線から二股に分岐して並列する四字文（π字文）が施されている。文様は口縁部に集中し、体部は無文である。脚と思われる小突起が体部下方についている。

第39図6は台付鉢の口縁部片である。幅の狭い工字文が口縁部を横走している。断面形はゆるやかに膨らみ、口縁部でほぼ垂直に立ち上がる。口唇部は丸みを帯びている。

そのほかは鉢と思われる。第37図7、10は工字文を形成する沈線の両端に二個一対の粘土瘤が貼り付けられている。いずれも体部は無文であり、表面が磨かれている。第38図1は工字文が多段に渡って連結し、頸部から体部に至るまで比較的広い範囲に施されている。流水工字文と思われる。

9類（第40図9～12 写真図版12-350～353）

晩期後葉から末葉（大洞A～A'式）に相当すると思われるものである。細片であり、全体のモチーフが不明であるため、中間に区分した。第40図9～11は壺の頸部と思われる。第40図12は台付鉢の底部台である。平行沈線が三条横走し、底部付近では沈線の両端に二個一対の粘土瘤が貼り付けられている。工字文の一部と思われる。沈線の間には磨消繩文が施されている。

10類（第15図11、第41図1～6 写真図版6-28、13-354～359）

繩文時代晩期末葉（大洞A'式）に相当すると思われるものである。二～三条の平行沈線間にある区画を浮彫り的な隆帶とし、それが直行と斜行を繰り返して直線的波形（または三角形）を描いている。変形工字文と思われる。平行線と斜線の交点（直線的波形または三角形の頂点）に二個一対の粘土瘤が貼り付けている器種もある。口縁部は平縁をなすもの

と、波状口縁、波の頂点が二股に分かれるものがある。口縁部裏面には沈線が一条巡っており、波の頂点に向かって1本枝分かれするものもある。第41図1は皿であり、口縁付近に粘土瘤のない変形工字文が施されている。体部には磨消繩文が見られる。第41図5は浅鉢の口縁部片と思われる。平縁で、粘土瘤のある変形工字文が施されており、地文はない。第41図6は台付鉢の底部台である。第41図7は(台付)浅鉢の口縁部片である。波状口縁で、頂点が二股に分かれている。粘土瘤のない変形工字文である。第15図3は浅鉢(台付鉢)と思われる。粘土瘤をもつ変形工字文が描かれている。第15図11は台付鉢の台部と思われる。

第VI群土器(第16図1、第41図7~10 写真図版6-29、13-360~363)

繩文時代晩期末葉~弥生時代初頭(大洞A'~弥生)に相当すると思われるものである。

第41図8は(台付)浅鉢の体部片と思われる。変形工字文の文様単位が、隆帯でなく、区画線の平行沈線を主体に描かれている。第16図1は皿である。波状口縁をなし、波の先端部が尖っている。粘土瘤のある変形工字文が口縁部を巡り、体部を横走する沈線の間に繩文が施されている。

第VII群土器(第16図2、第41図11~12 写真図版6-30、13-364~365)

弥生時代に相当すると思われるものである。第41図11は(台付)浅鉢の口縁部片である。変形工字文が見られるが、前段階のA'に比べ、沈線の溝が浅く、細線化しており、隆帯よりも沈線を強調して描かれている。ゆるやかな波状口縁である。第41図12は土器の蓋である。断面形で見ると、側面と上面のつながりがほぼ垂直を示している。文様は太めの沈線で描かれ、上面は中心から放射状に引かれた無数の沈線で表わされる。側面には4条の平行沈線が巡っている。第16図2は深鉢である。口縁部に二条の平行沈線を巡らせ、その間に上下からの刺突を施すものである。平行沈線は口縁部に沿って波状をなす。体部には弧線による山形文が上下に向き合って横走し、互いの山と谷が噛み合う形で文様を形成している。一部に繩文が縦走している。断面形は体部中央でややくびれ、口縁に向かってゆるやかに外反する。

第VIII群(第42図1、7、13、第43図1、2、9、第44図6、7、10、第45図1、4、6、7、9~12、第46図、第47図1~4、8、9、第48図3、13、第12図2~4 写真図版13-366、372、378、381、382、389、398、399、402、14-404、407、409、410、412~425、429、430、434、444)

頸部~口縁直下に文様が施されるものをまとめた。形状はいずれも鉢片と思われる(第48図13を除く)。口縁部を巡る数条の沈線または狭小の無文帶、原体側面圧痕、粘土瘤貼り付け等によって文様が描かれている。口唇部には押圧による綫の刻み目が施される。

第42図1は肩部が丸みを帯びて膨らみ、頸部から口縁にかけて外反ぎみに立ち上がる。六条の平行沈線が横走している。7は肩部と口唇部に二個一対の粘土瘤が貼り付けられ、口縁部に三条の平行沈線が横走している。第43図1は肩部に二個一対の粘土瘤を貼り付け、その間に押圧による谷間を施すものである。第44図6、7第、40図1は口縁を巡る沈線が狭少で、断面形がやや丸みを帯びて内傾する。第45図4、7、9、10~12、第46図、第47図1、第47図2は

波状口縁をなす。肩部が直線的に張り出し、頸部から口縁部にかけて外反する。第42図8は肩部に粘土瘤の貼り付けが見られる。第48図3は口縁直下に磨消による無文帯が巡っている。口唇部が丸みを帯びて外反し、押圧が連続で施されている。第43図13は広口壺の口縁部とと思われる。口縁部を横に撫でて磨消し、無文帯を巡らしている。断面形は外反し、口縁部から頸部にかけての傾きがやや大きい。体部の縄文が横走しており、原体を斜め方向に回転させたものと思われる。

第IX群（第42図2～6、8～12、14、15、第43図3～6、8～12、第44図1～5、8～11、第45図2、3、5～6、8、第47図5～7、10、第48図1～2、4～12、第49図
写真図版13～367～371、373～379、383～388、390～397、400～403、14～405～406、408、411、426～448、431～433、435～460）

深鉢と思われるものを以下のとおり分類した。

- 1類 肩に屈曲を持ち、口縁に沈線を巡らすもの
- 2類 口縁部に狭小の無文帯をめぐらすもの
- 3類 底部から口縁部にかけて直線的に開き、文様帯をもたないもの
- 4類 口縁部が内傾し、文様帯をもたないもの
- 5類 その他

1類（第42図2～6、8～12、14、15、第43図3、5、7、8、10～12、第44図1、2、5、8、9、11、第45図2、3、5、6、8、第47図7、8 写真図版13～367～371、373～379、383～388、390～397、400～403、14～405～406、408、411、426～444、15～445～460）

口縁部を巡って1条～数条の平行沈線が横走し、口唇部に沿って押圧による連続した刻み目が施されている。口唇部の多くは平縁だが、波状を成すものもある。刻み目は縦・斜めに細長く、狭い間隔で巡るものと、筒状の工具で半円形に押圧されたものや、平たく、横に広いものなどに分けられる。平行沈線の上下の間隔、数にも幅がある。体部には縄文（主に単節斜縄文L R・R L）が施されている。

2類（第48図1、2、4～12、第49図 写真図版14～432、433、435～15～460）

口縁部に無文帯を持つ土器であり体部には縄文が施されている。さらに以下のように細分した。

- ①無文帯と体部の境界を横走する沈線によって隔てているもの
- ②無文帯と体部の境界を横走する原体側面圧痕によって隔てているもの
- ③沈線等の区画をせず、体部の施文調整及び磨消によって無文帯を形成しているもの

断面形を見ると、①の無文帯は直線的な立ち上がりをしており、直立、ないしゆるやかに外反する。②の無文帯はやや内側にくびれ、その後、口唇部付近で外反する。③も同様

だが、くびれの凹面が②よりも急角度である。口唇は平縁で、押圧による刻みで細かな波状をなすものもある。

第44図14～16は口縁部片である。原体側面压痕を二条平行に巡らして口縁部を区画し、その間に無文帯を形成している。体部の地文は横走しており、原体を斜め方向に回転させて施文したものと思われる。焼成がやや甘く、表面は黄灰色を呈する。

3・4類に該当する土器はなかった。

5類（第43図4、6、8、第44図3、4、8、第45図8 写真図版13-384、386、388、396、397、400、14-411）

断面形を見ると、第43図4は体部から口縁部まで直線的に広がる。8は口縁部が内湾する。

第43図3、4、8は頸部でやや膨らみ、ほぼ垂直に立ち上がる。第40図8は頸部から口縁部まで外に広がり、口縁部から垂直に立ち上がる。

第X群（第50図～第51図2 写真図版15-461～485）

その他、分類できなかった土器を一括した。

第XI群（第51図3～12 写真図版15-486～495）

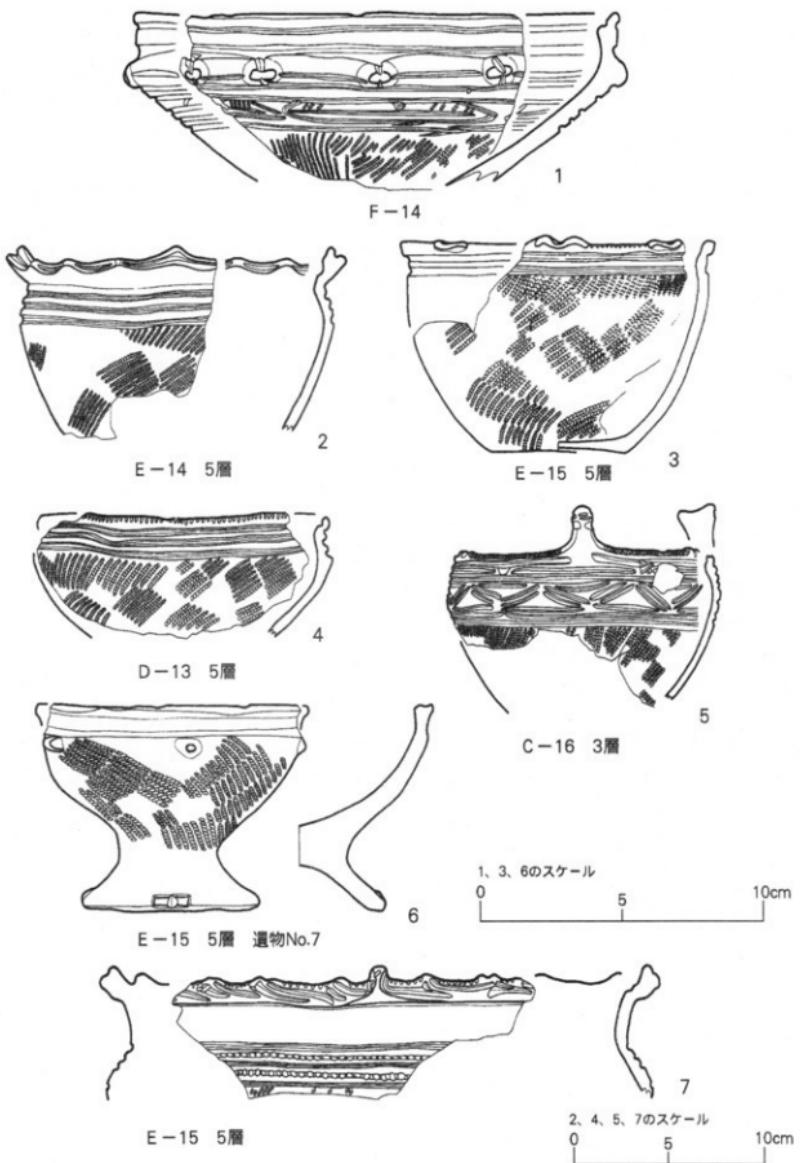
土器の底部をまとめた。

- ①網代底（一本越え一本送り）（第51図3～5）
- ②網代底（二本越え二本潜り一本送り）（第51図6）
- ③網代底（三本越え三本潜り一本送り）（第51図7、8）
- ④編み籠底（第51図9）
- ⑤木の葉底（第51図10、11）
- ⑥笹の葉底（第51図12）

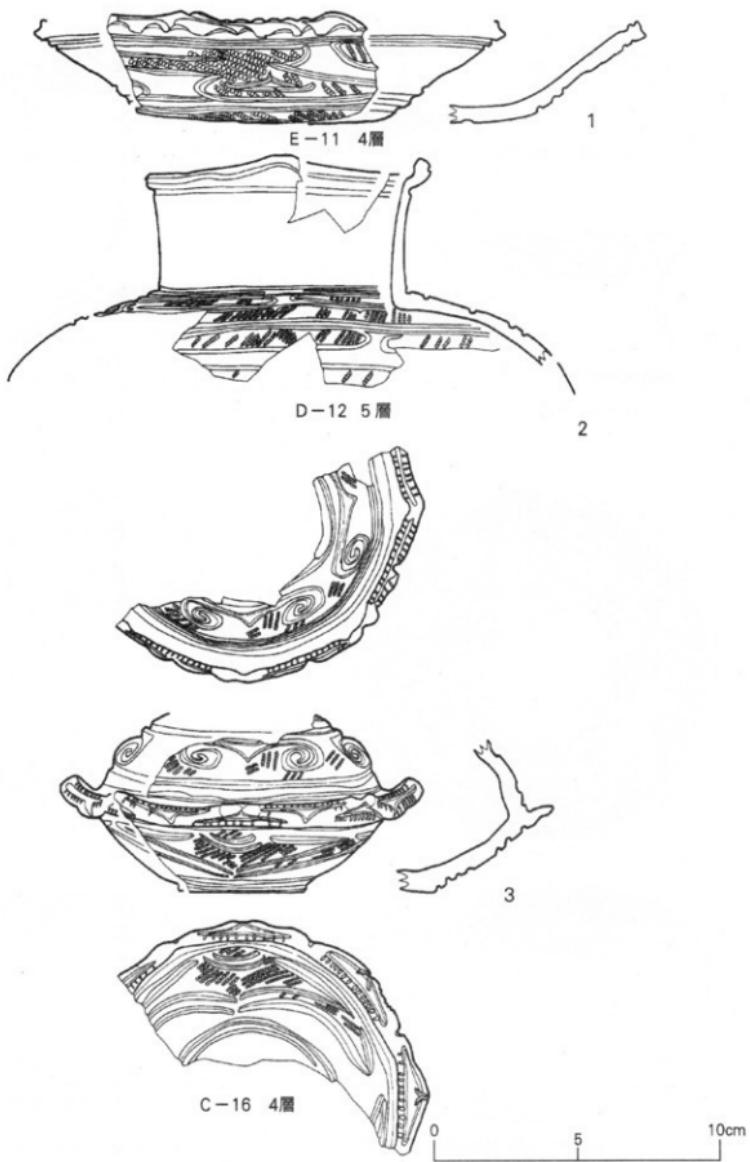
形状は第51図5、6、9、12がほぼ真円で、他は細片のため特定できない。断面形を見ると第51図3、5、7、8、10、11は土器側面への立ち上がりを残して割れている。うち5は底部中央が内部で膨らみを帶びている。

第XII群（第51図13 写真図版15-496）

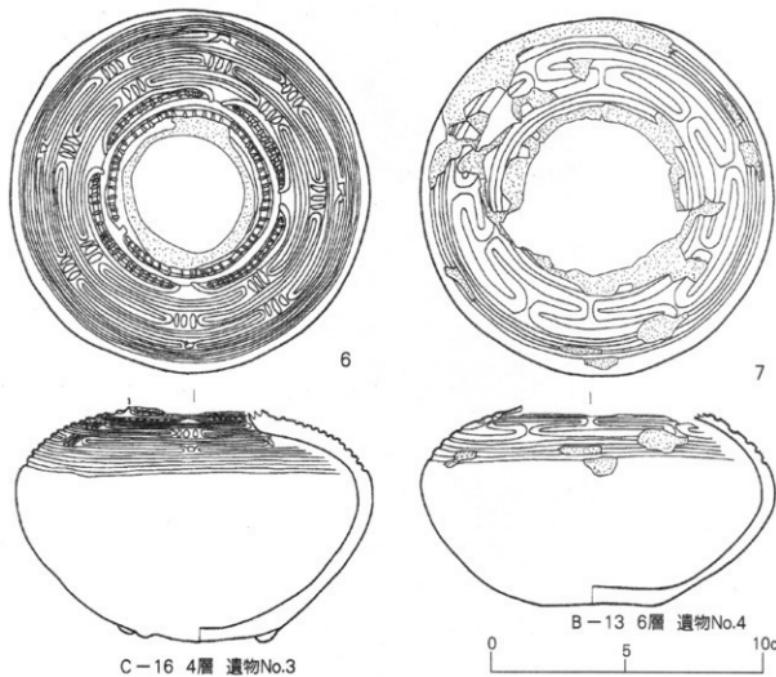
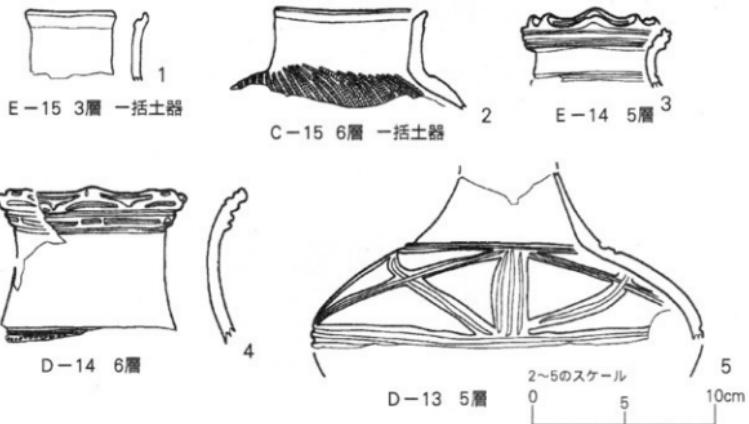
土師器（坏）の底部が一点のみ出土している。底部は左廻りの糸切りである。



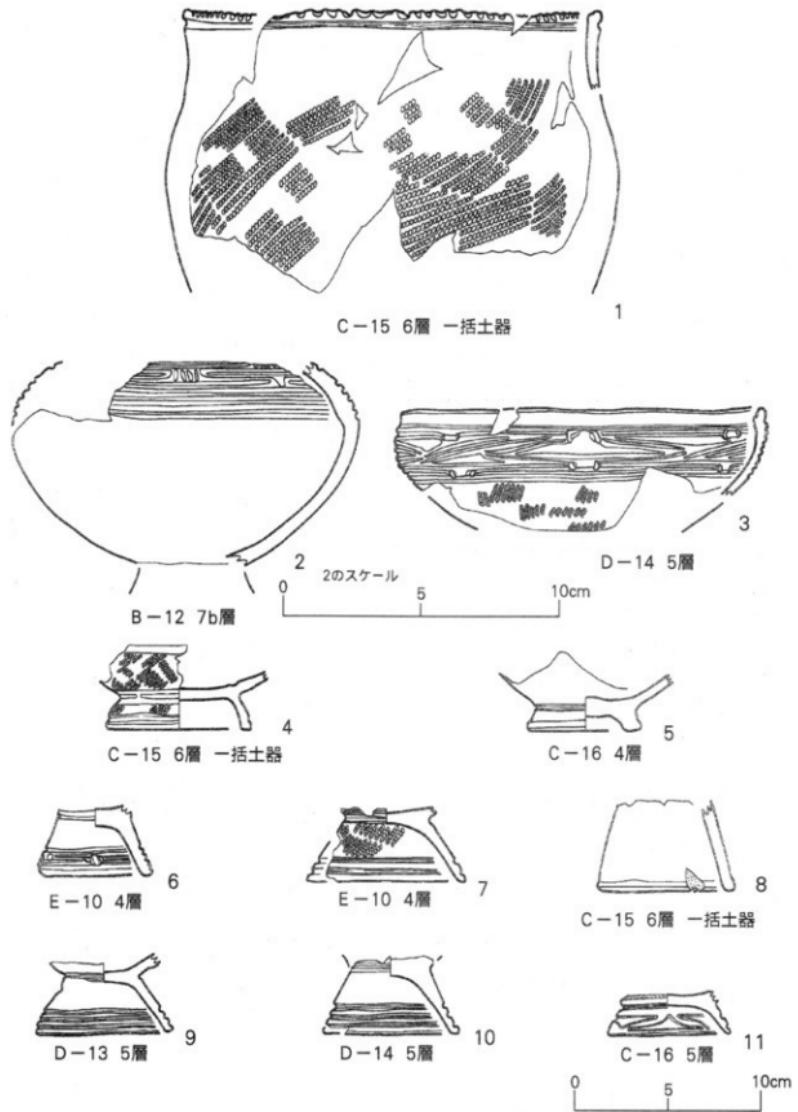
第12図 遺構外出土土器



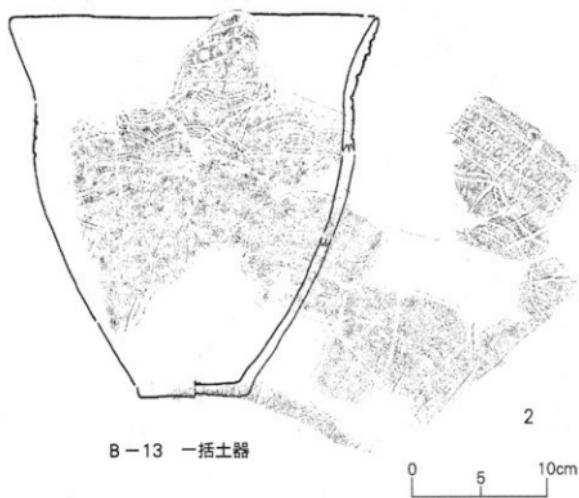
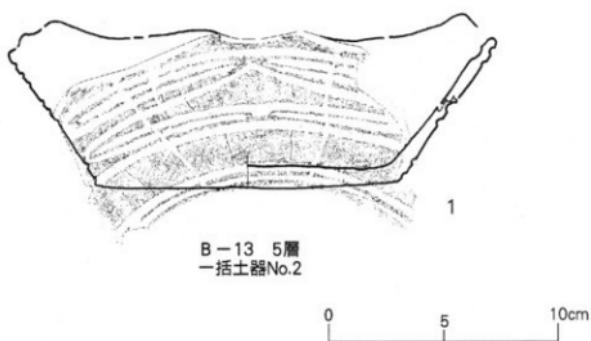
第13図 遺構外出土土器



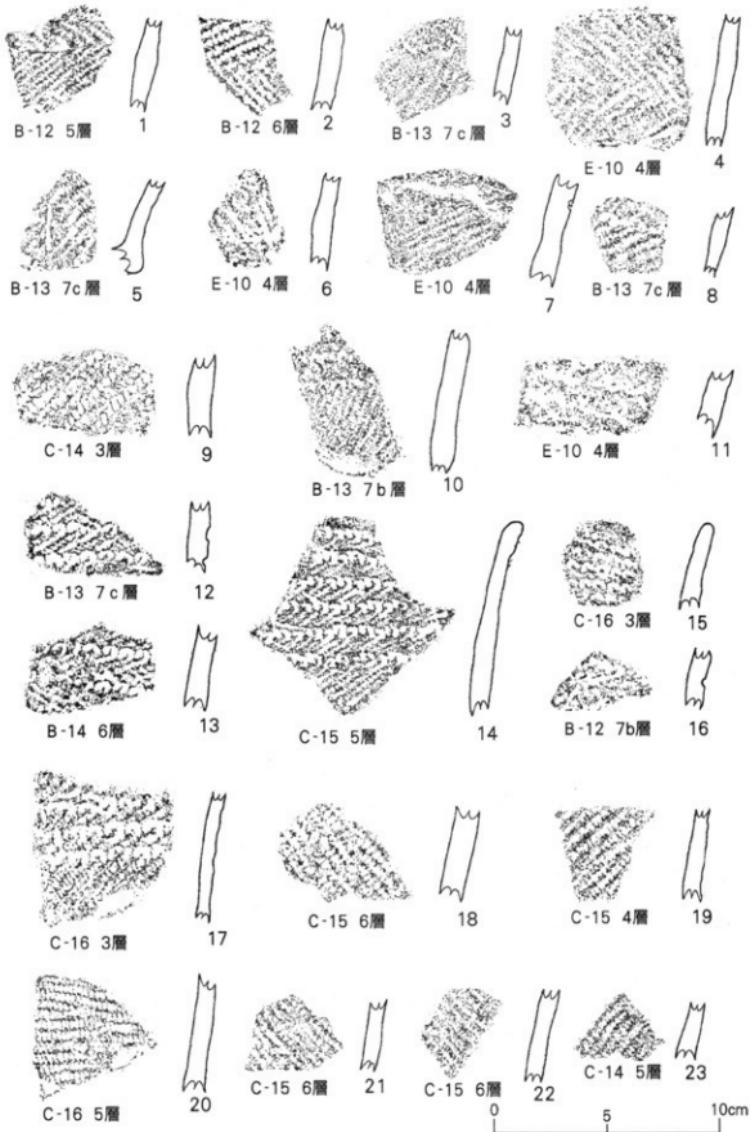
第14図 遺構外出土土器



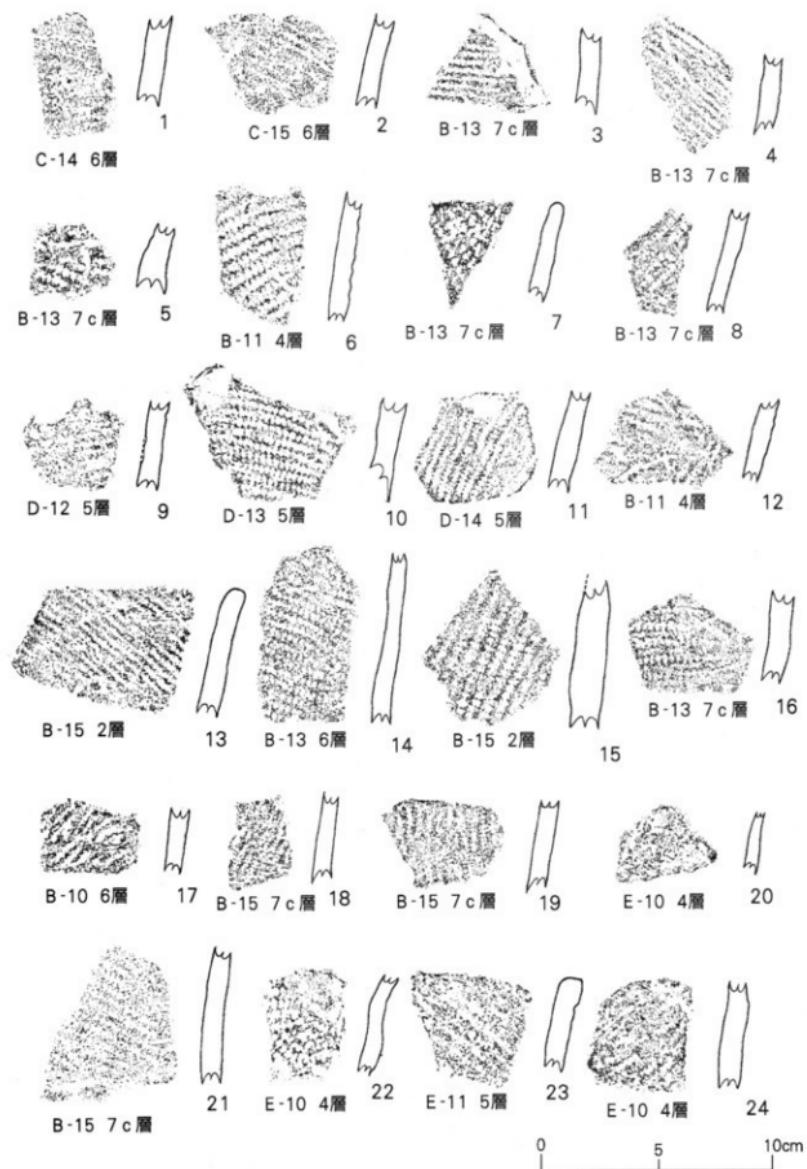
第15図 遺構出土土器



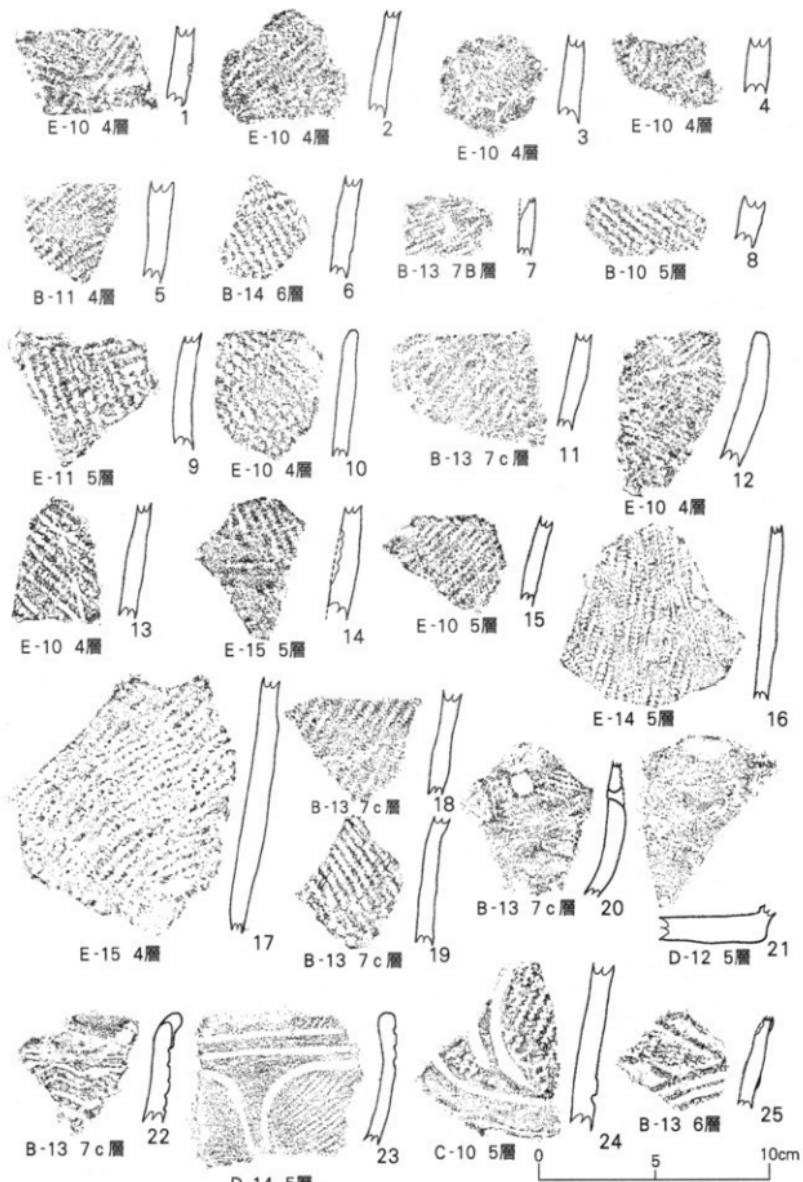
第16図 遺構外出土土器



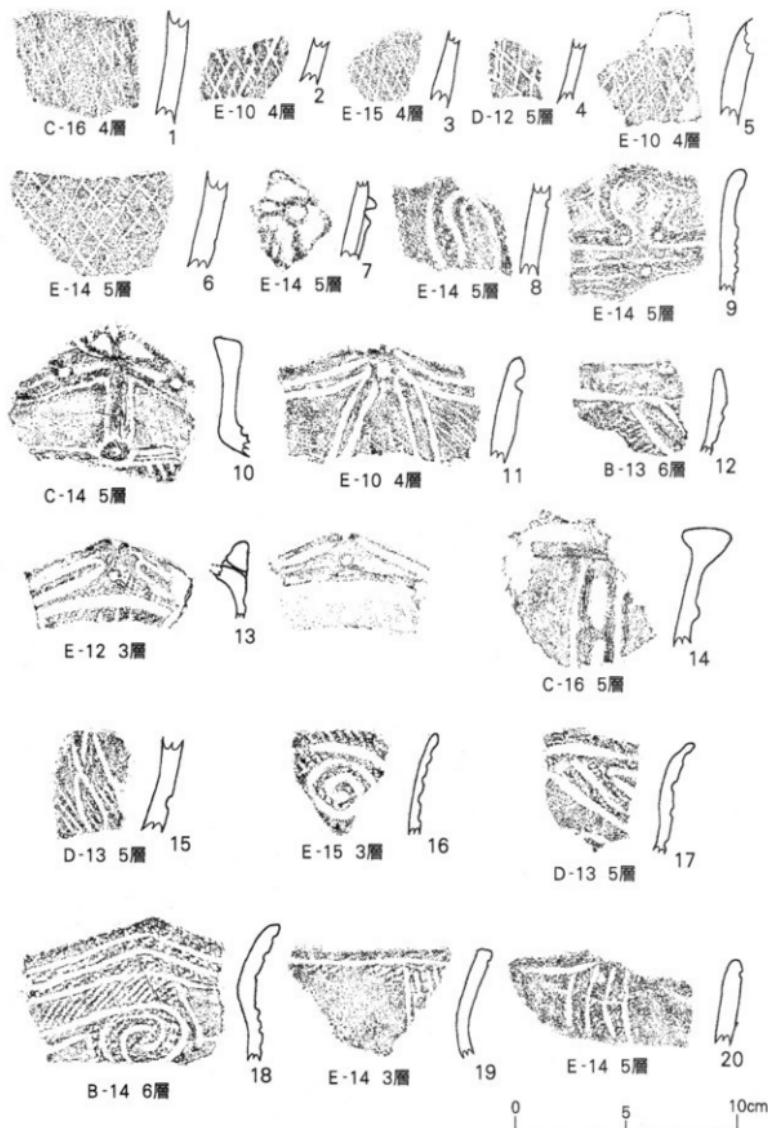
第17図 遺構出土土器



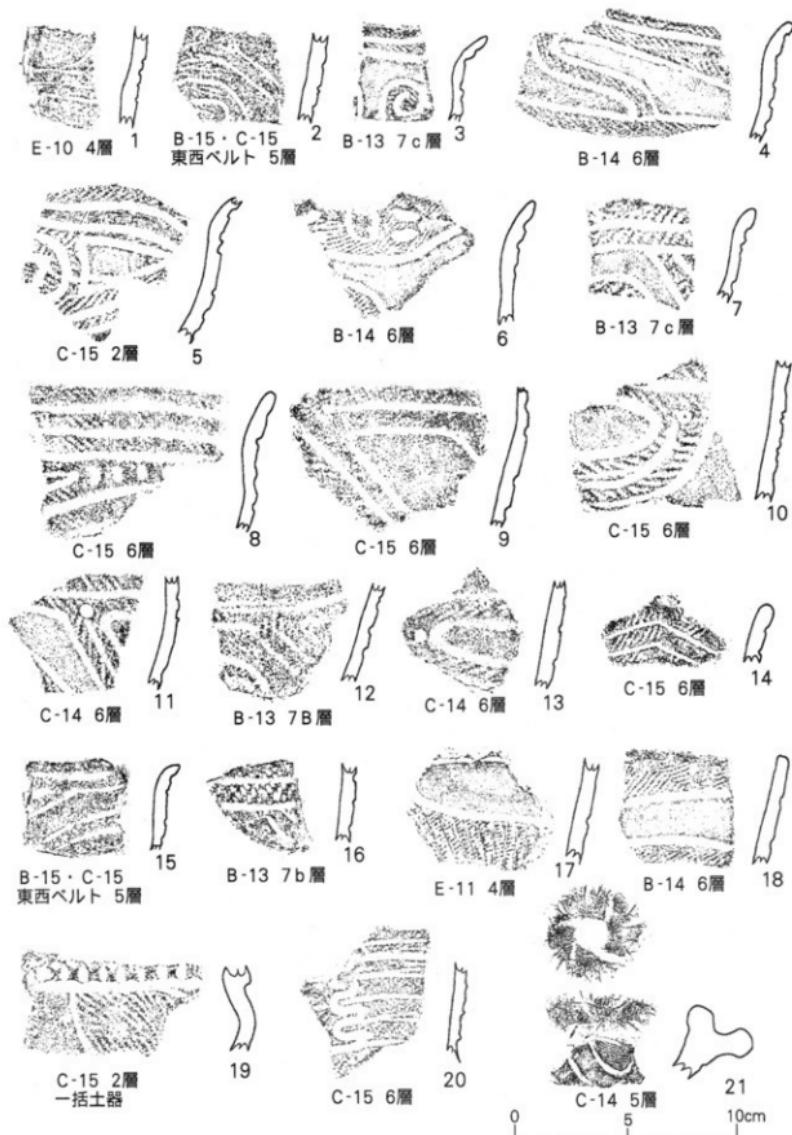
第18図 遺構出土土器



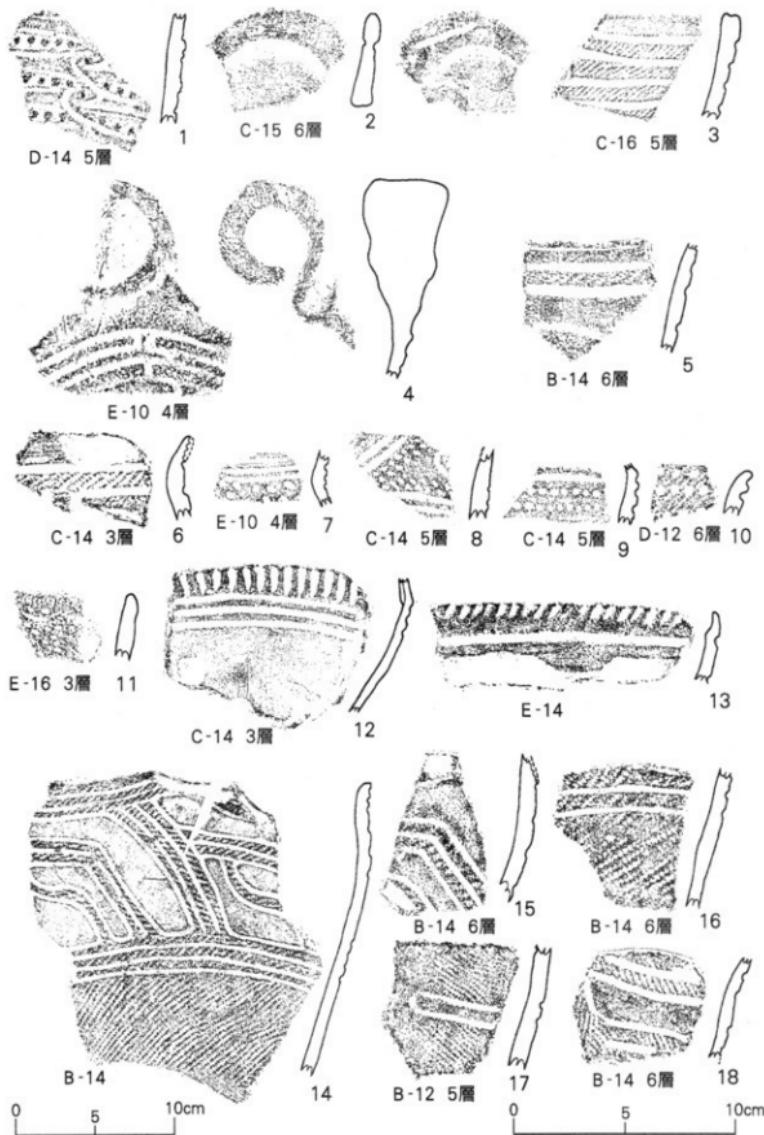
第19図 遺構出土土器



第20図 遺構外出土土器



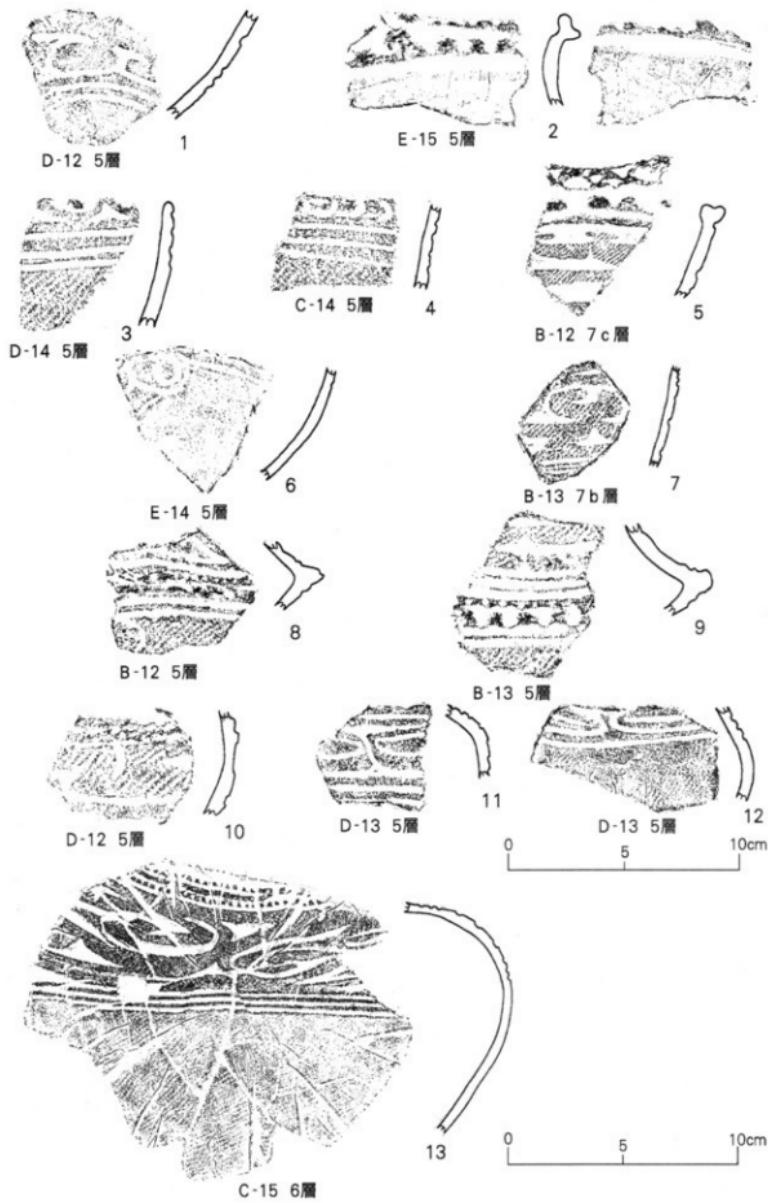
第21図 遺構外出土土器



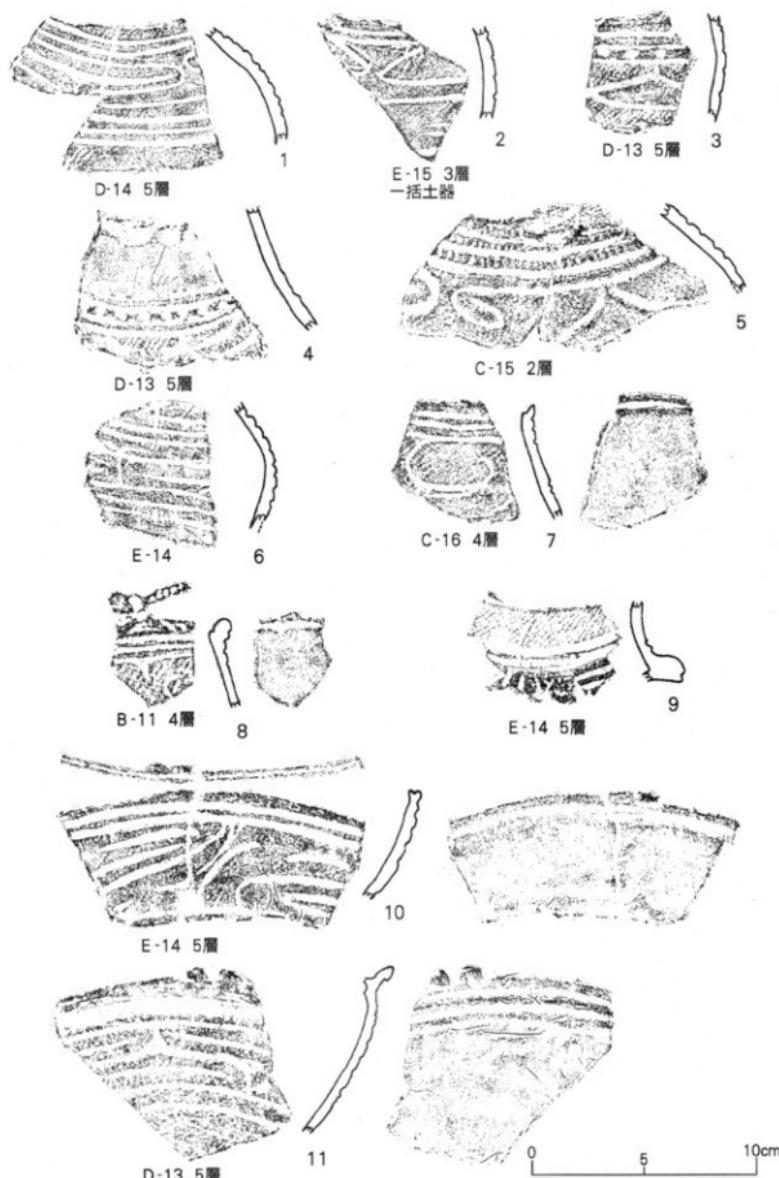
第22図 遺構外出土土器



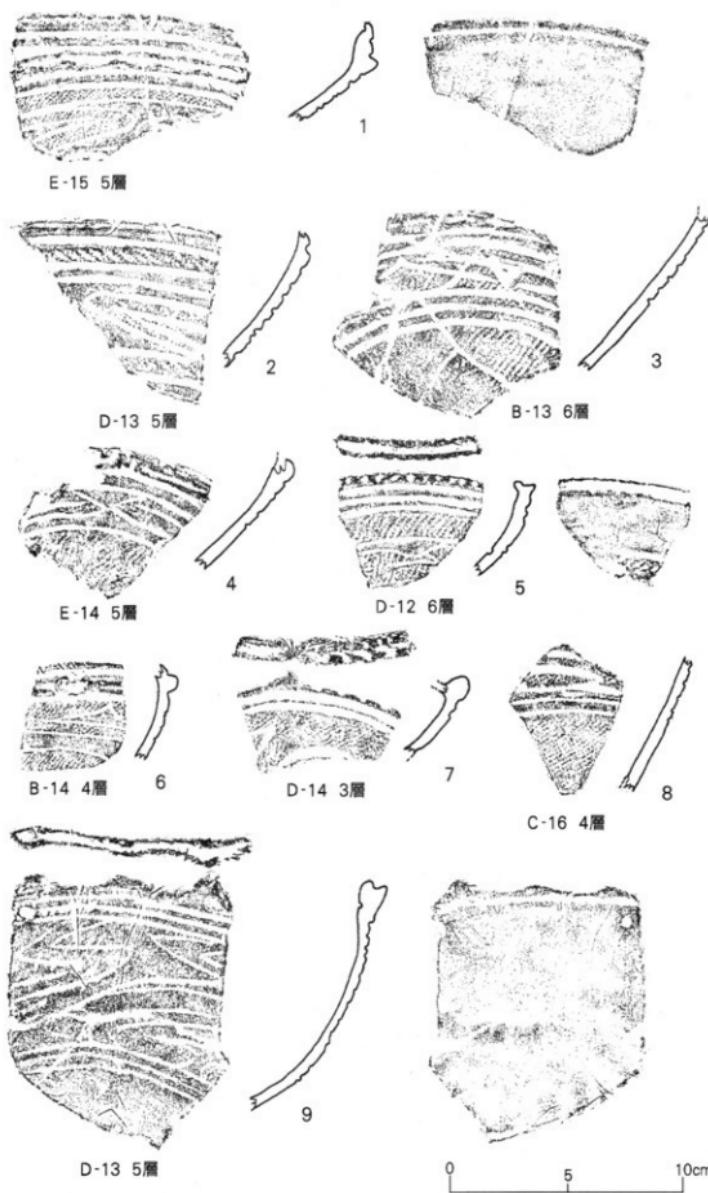
第23図 遺構外出土土器



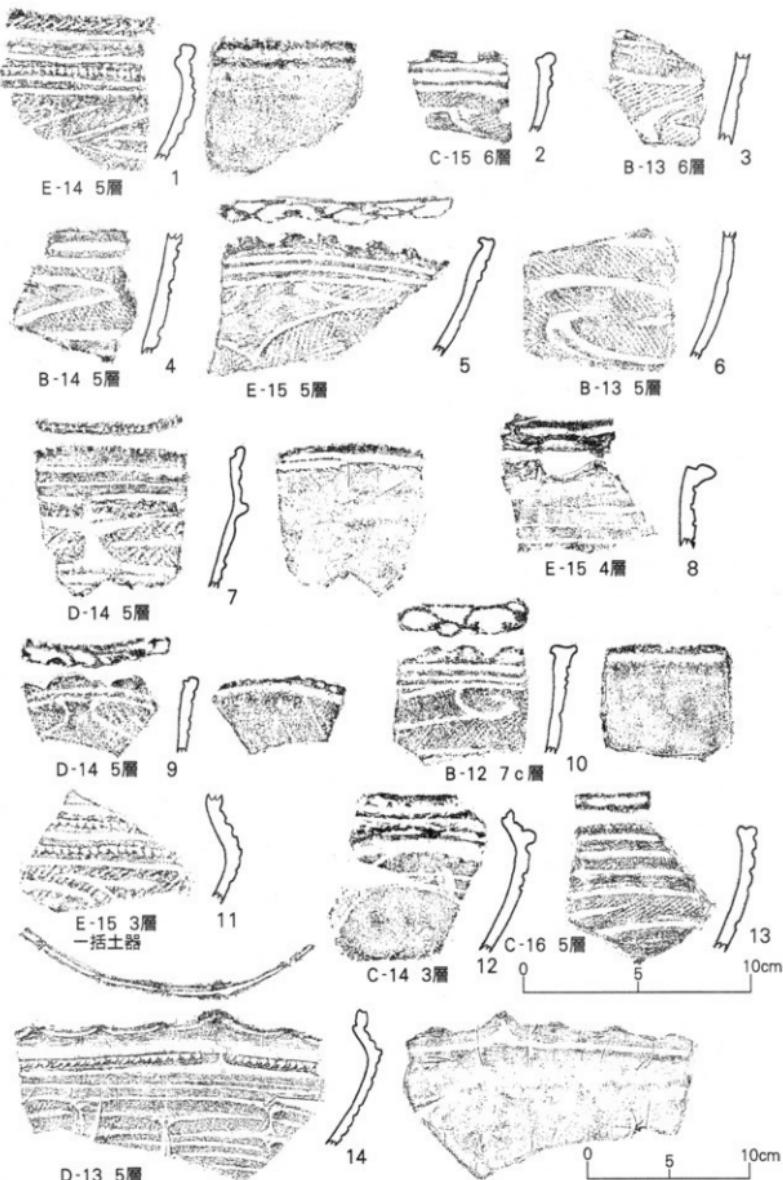
第24図 遺構外出土土器



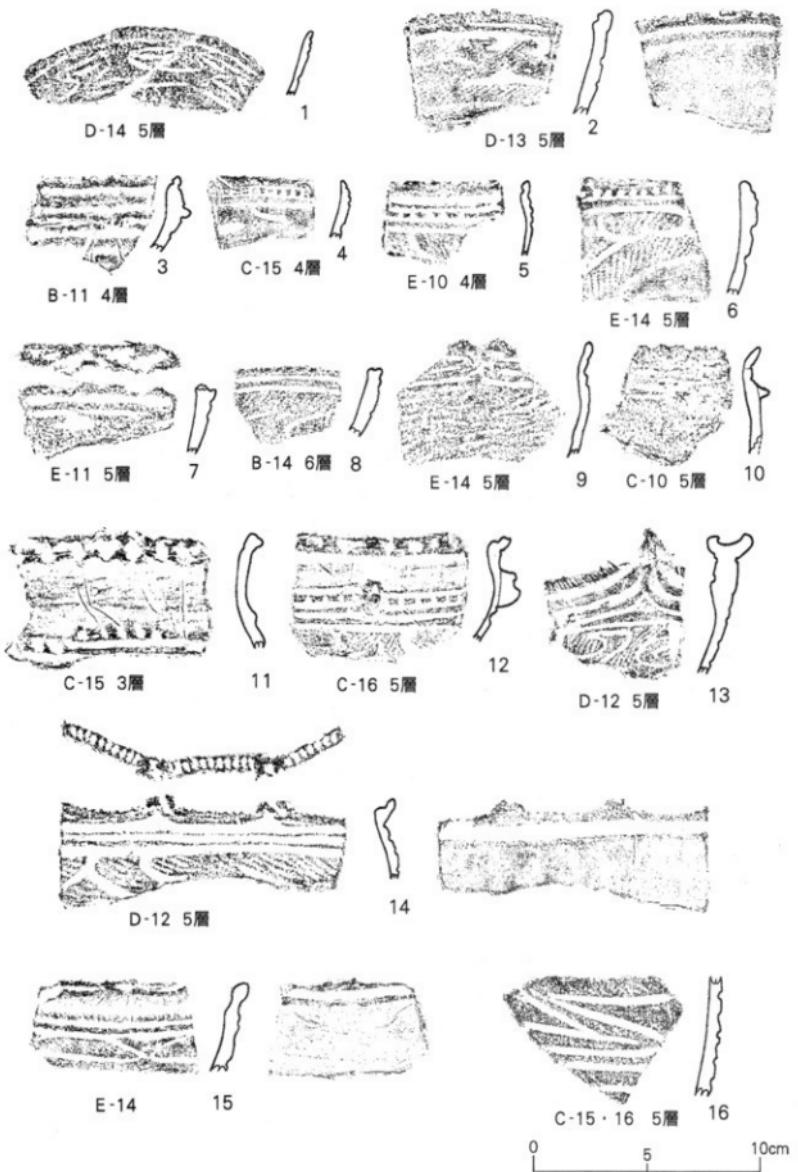
第25図 遺構外出土土器



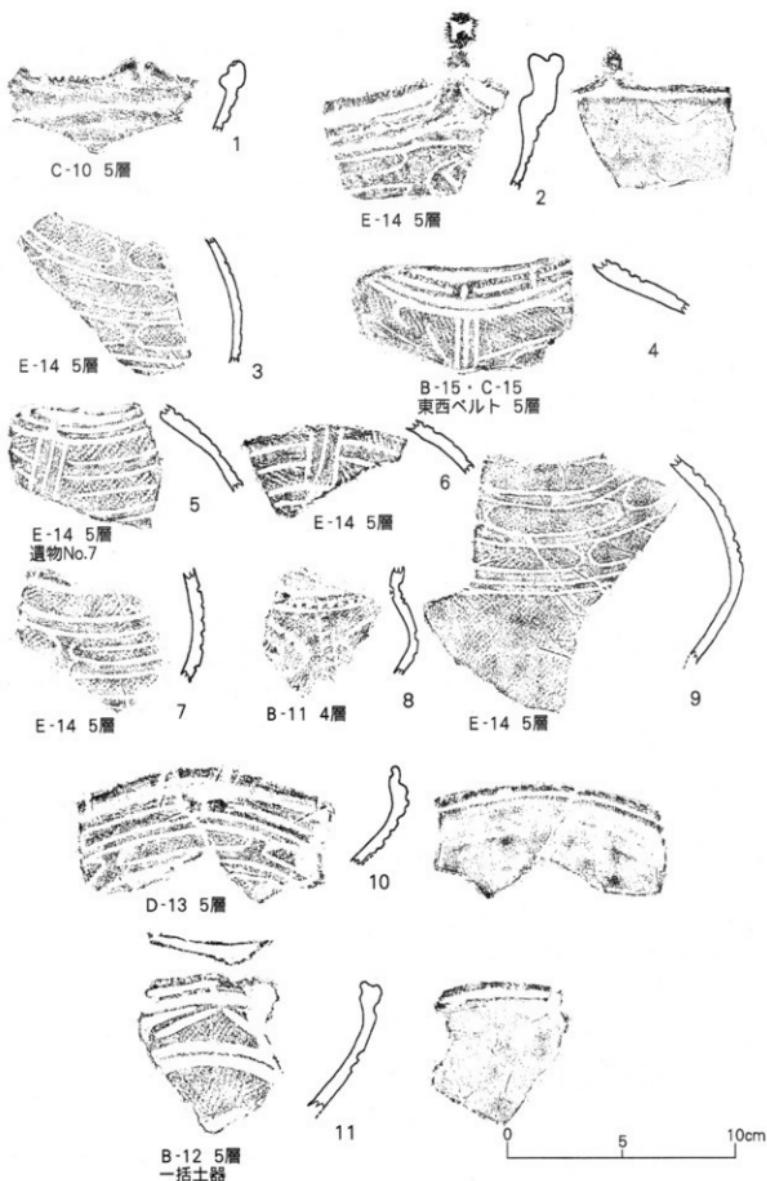
第26図 遺構外出土土器



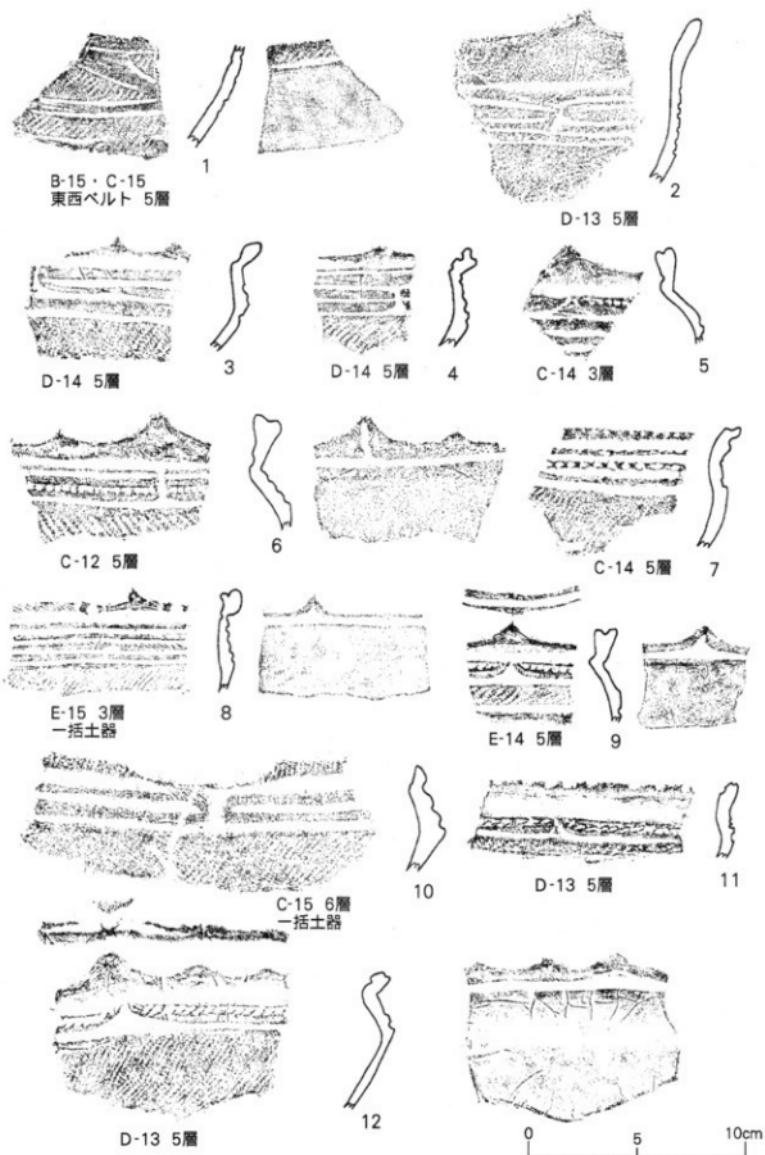
第27図 遺構外出土土器



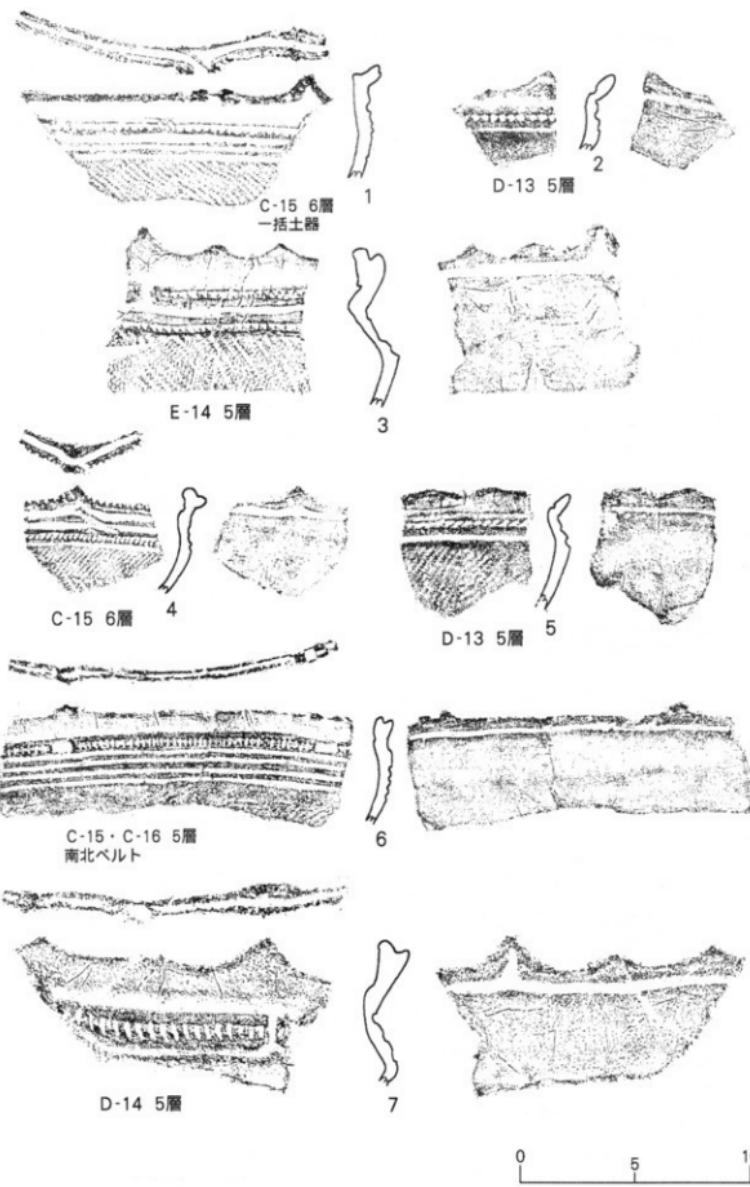
第28図 遺構外出土土器



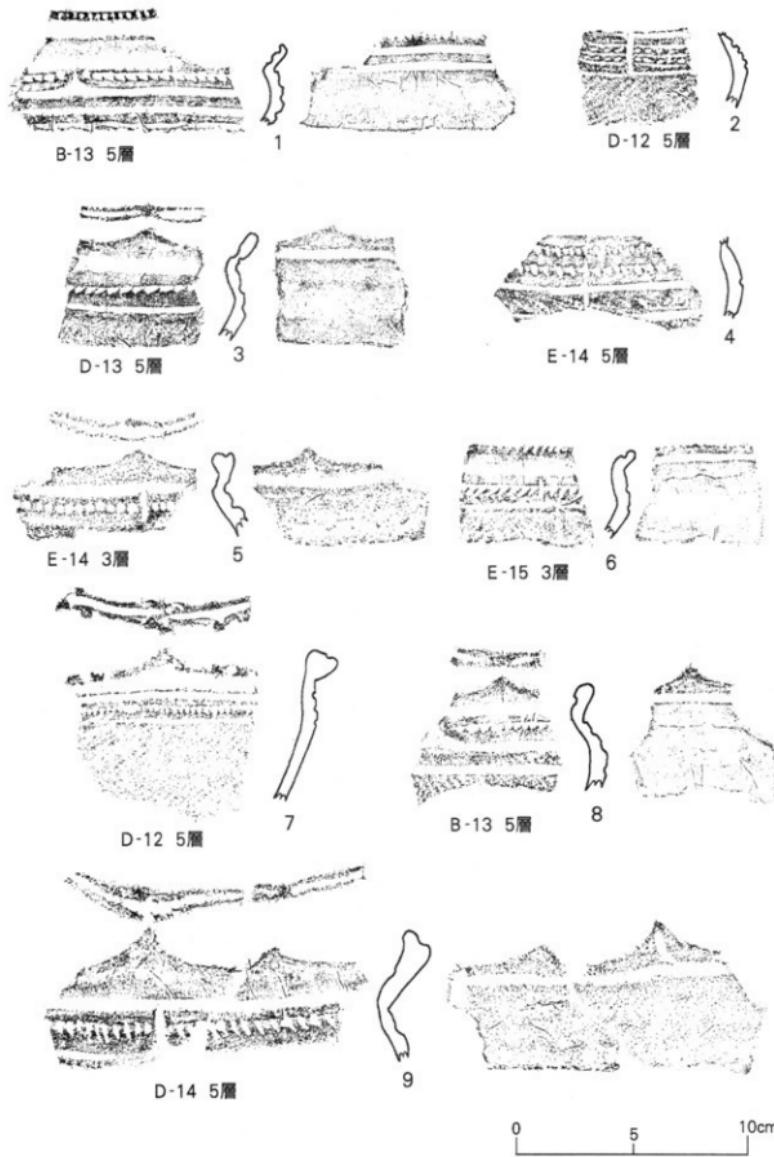
第29図 遺構外出土土器



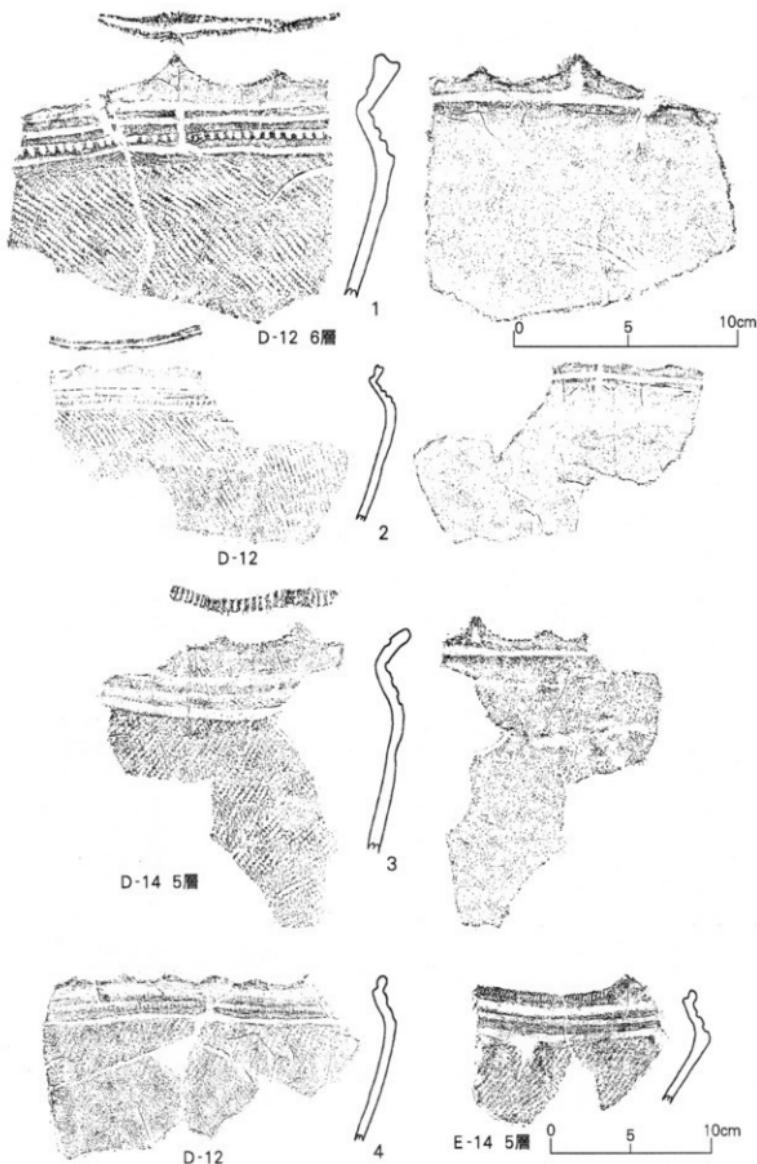
第30図 遺構外出土土器



第31図 遺構外出土土器



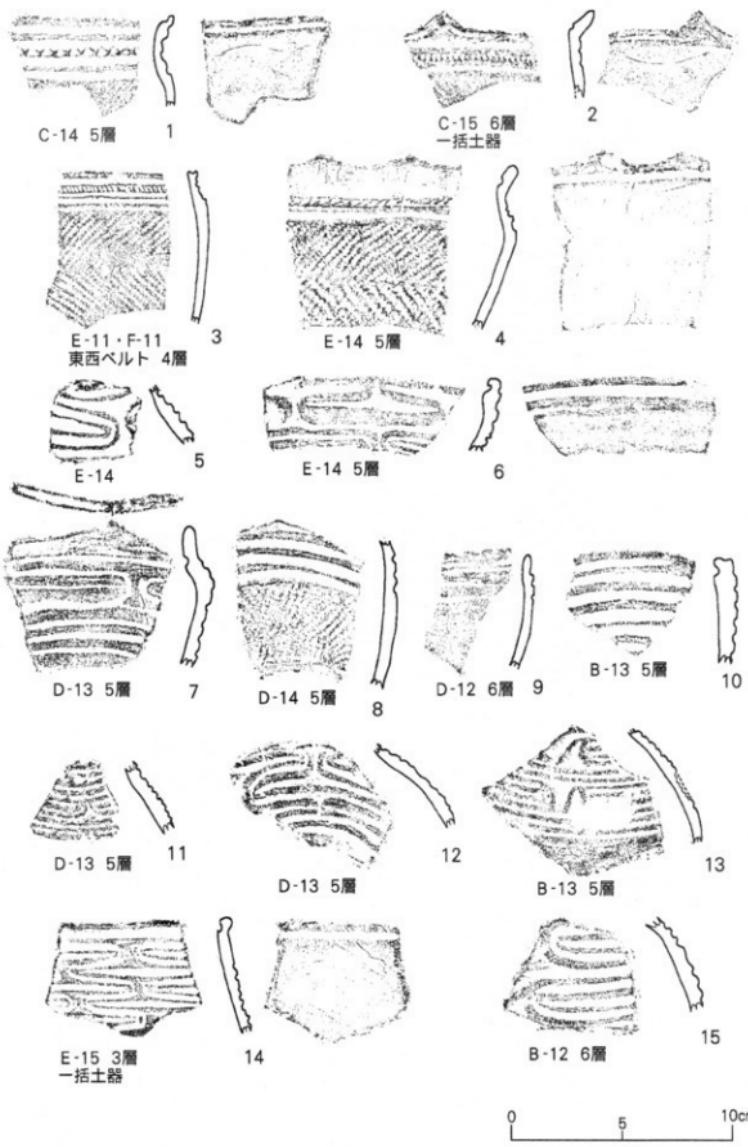
第32図 遺構外出土土器



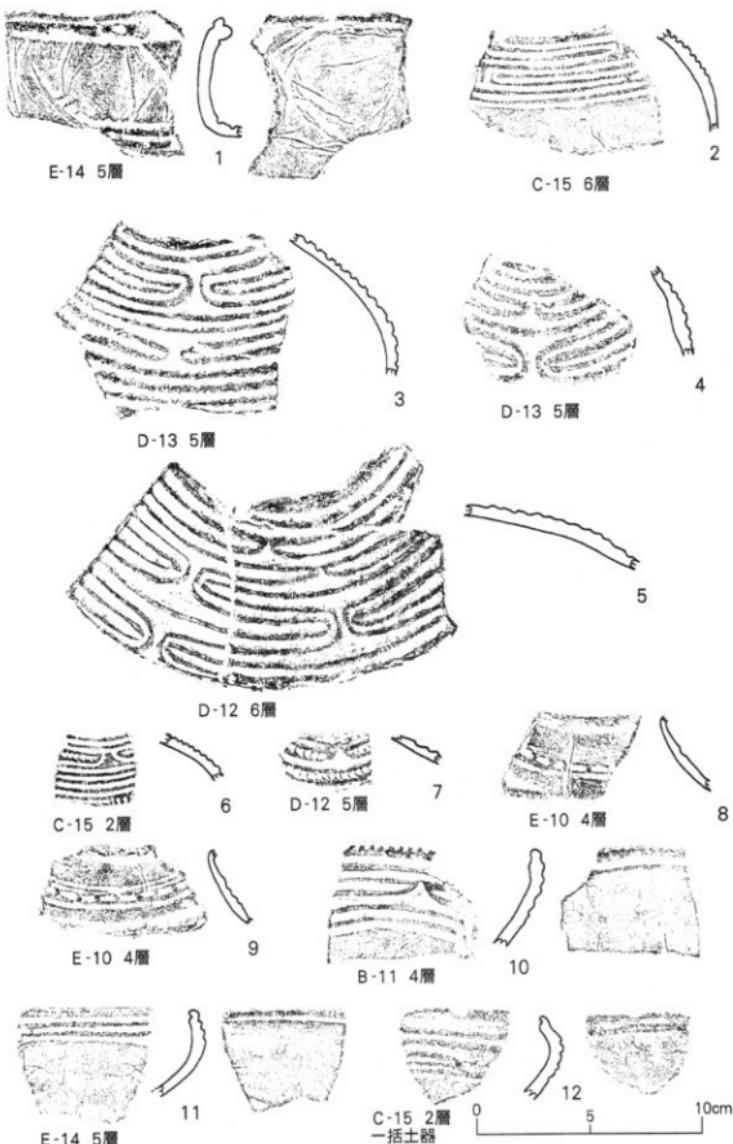
第33図 遺構外出土土器



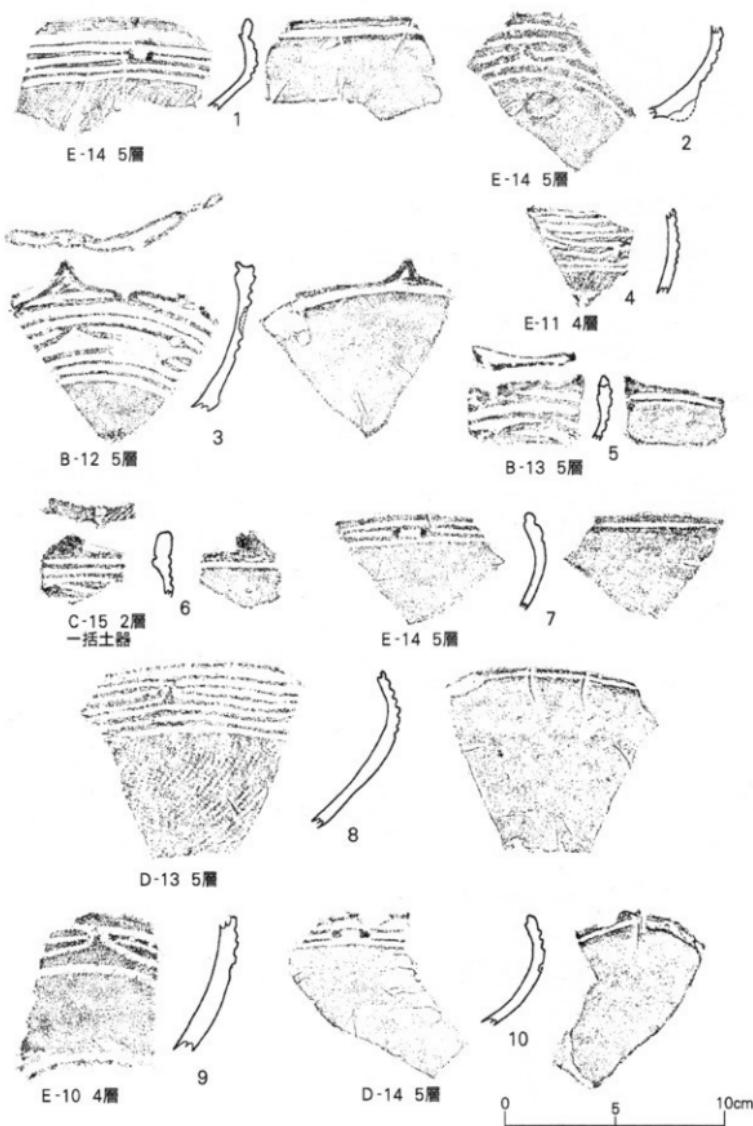
第34図 遺構外出土土器



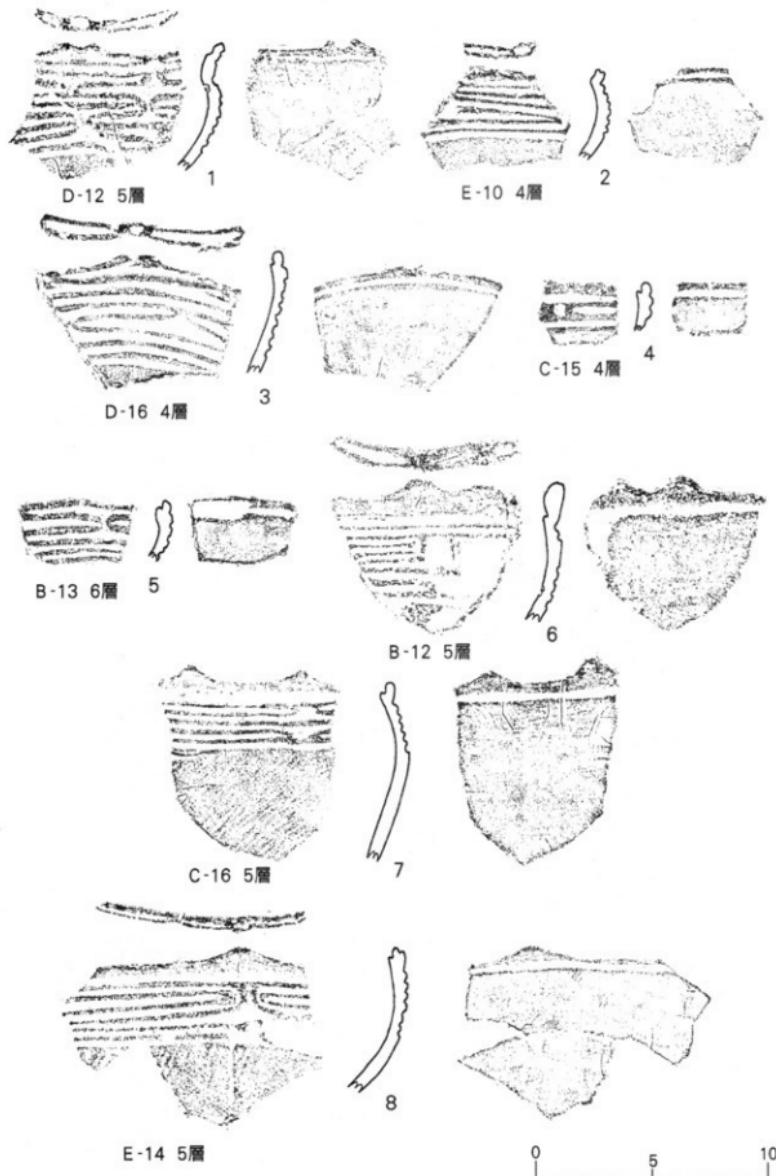
第35図 遺構外出土土器



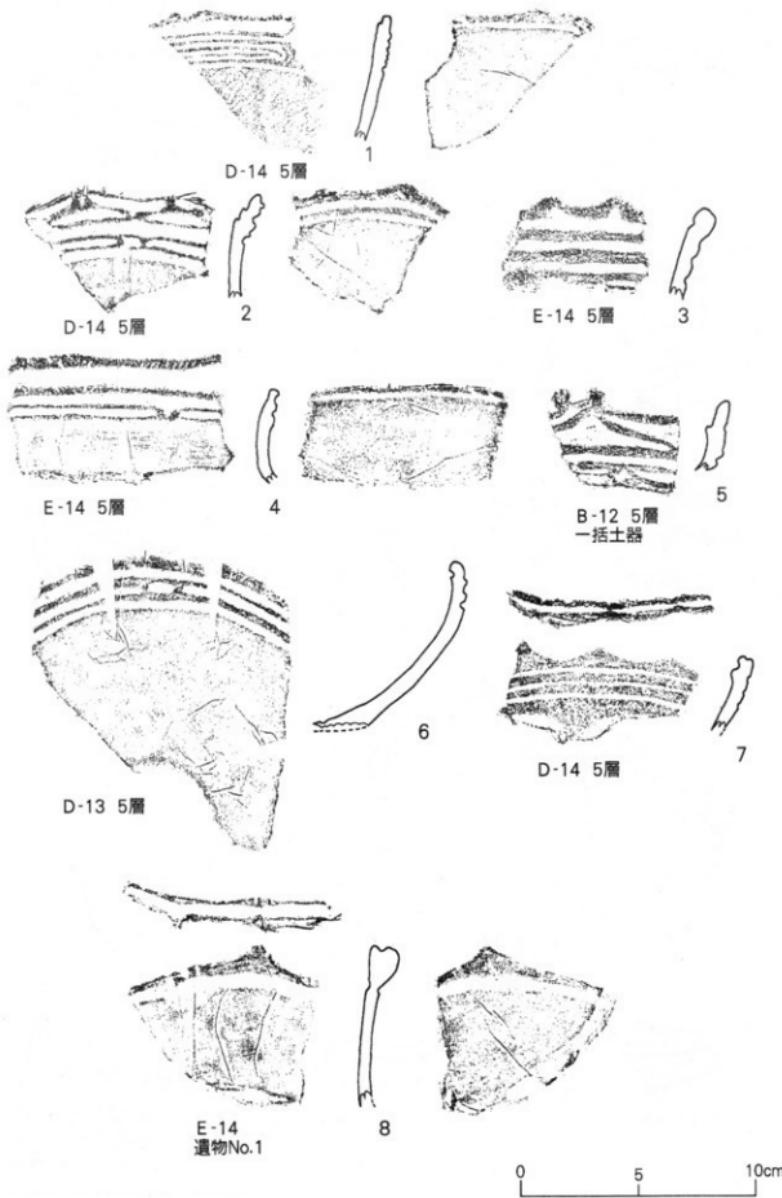
第36図 遺構外出土土器



第37図 遺構外出土土器



第38図 遺構外出土土器



第39図 遺構外出土土器